

さ い き じょう か まち い せき  
佐伯城下町遺跡

けい ろ かん あと  
警露館跡

平成22年度佐伯市歴史資料館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2015

大分県  
佐伯市教育委員会



# 序 文

本書は平成22年度に実施した、佐伯城下町警露館跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

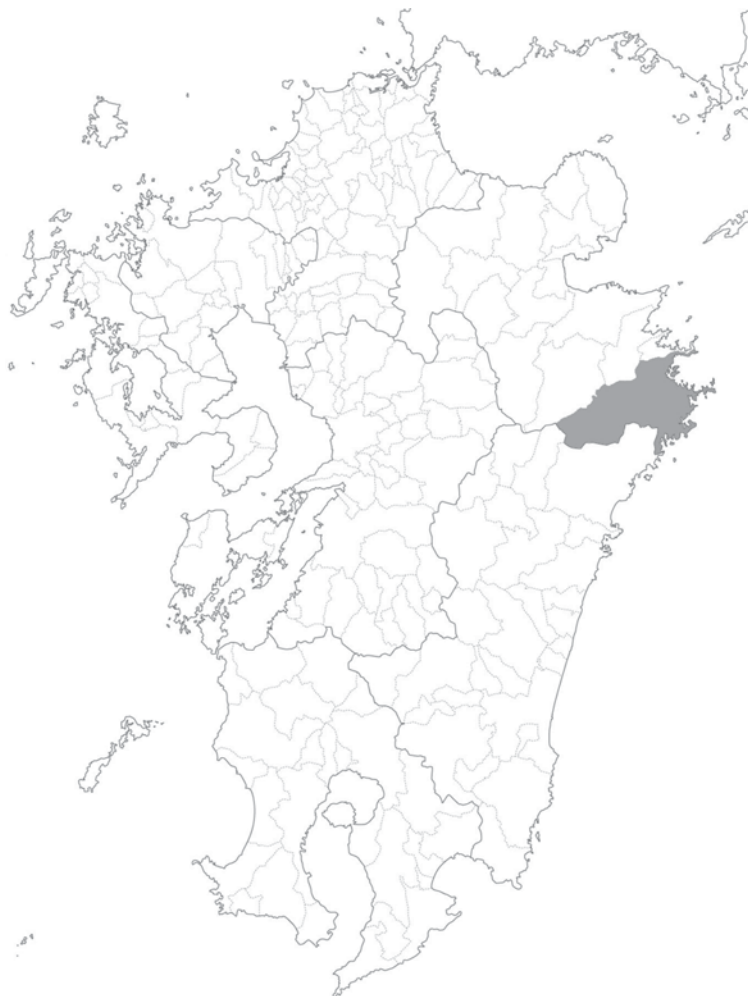
警露館は、明治時代初期に旧藩主であった毛利家が佐伯で過ごすために建てられた邸宅です。のちに一般に開放され、民間に払い下げられて料亭となっていました。このたび佐伯市では、この警露館の跡地に歴史資料館を建設することとなったため、発掘調査を行いました。調査の結果、警露館の一部を構成する遺構が発見され、その変遷が明らかになってきました。さらに遺構の一部は歴史資料館の敷地内に移設し、来館者の皆様に見ていただけるように保存しています。

最後になりましたが、この報告書が郷土の歴史研究や文化財の保護と理解への一助となり、多くの方に活用していただければ幸いです。

平成27年3月31日

佐伯市教育委員会

教育長 分 藤 高 嗣



# 例 言

- ・本書は、平成22年度に実施した佐伯城下町警露館跡の発掘調査報告書である。
- ・調査及びに報告書作成は佐伯市教育委員会文化振興課・社会教育課が主体となって実施した。
- ・本報告書の執筆は福田が担当した。
- ・発掘調査における遺構実測及び写真撮影は、福田・五十川が行った。
- ・空中写真は、撮影を九州航空株式会社に委託して実施した
- ・本報告書で用いる方位は磁北、標高は絶対高である。グリッドは任意の座標によって設定した。
- ・調査にかかる記録類や出土遺物は、佐伯市教育委員会が保管している。
- ・本報告書では、整理作業及び執筆時の混乱を避けるため、遺構番号（S番号）は発掘調査時のものを使用している。

# 目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 地理的・歴史的環境	2
第2章 調査の成果	5
第1節 調査の概要	5
第2節 A区の調査	8
第3節 B区の調査	14
第3章 まとめ	23
第1節 調査地の変遷	23
第2節 写真資料の検討	24
第3節 まとめ	28
図版	31

# 挿図目次

第1図	周辺遺跡地図 (S=1/50,000) .....	5
第2図	土層断面図 (S=1/80) .....	5
第3図	警露館跡遺構配置図 (S=1/200) .....	6・7
第4図	A区検出遺構配置図 (S=1/120) .....	8
第5図	1号井戸・1号側溝平面図 (S=1/80) .....	9
第6図	1号側溝出土遺物 (S=1/3) .....	9
第7図	1号建物礎石平面図 (S=1/80) .....	11
第8図	1号建物基礎平面図 (S=1/80) .....	11
第9図	1号建物出土遺物 (S=1/3) .....	12
第10図	2号建物平面図 (S=1/80) .....	12
第11図	2号建物出土遺物 (S=1/3) .....	12
第12図	A区整地層出土遺物 (S=1/3) .....	13
第13図	B区検出遺構配置図 (S=1/200) .....	15
第14図	1号土坑平面図 (S=1/40) .....	16
第15図	1号土坑出土遺物 (S=1/3) .....	16
第16図	2号土坑平面図 (S=1/40) .....	16
第17図	2号土坑出土遺物 (S=1/3) .....	17
第18図	3号土坑出土遺物 (S=1/3) .....	17
第19図	4号土坑出土遺物 (S=1/3) .....	17・18
第20図	3号側溝平面図 (S=1/160) .....	18
第21図	3号側溝出土遺物 (S=1/3) .....	18
第22図	1号埋め桶・2号埋め桶平面・断面図 (S=1/40) .....	19
第23図	1号埋め桶・2号埋め出土遺物 (S=1/3) .....	19
第24図	B区整地層出土遺物 (S=1/3) .....	20
第25図	A区検出遺構と大正8年頃警露館模式図 (S=1/500) .....	29

# 資料目次

資料1	明治44年(1911)頃佐伯市街地写真 .....	24
資料2	大正5年(1916)頃佐伯市街地写真 .....	24
資料3	大正8年(1919)頃空中写真及び警露館模式図 .....	25
資料4	昭和23年(1948)空中写真及び警露館跡模式図 .....	25
資料5	昭和40年(1965)空中写真及び警露館跡模式図 .....	26
資料6	昭和50年(1975)空中写真及び警露館跡模式図 .....	26
資料7	平成20年(2008)空中写真及び警露館跡模式図 .....	27
資料8	文政9年(1826)御城下分見明細図絵 .....	28
資料9	天祐館指図 .....	30

# 図版目次

図版 1	警露館跡周辺空中写真 南東から	調査区全景 手前が南東	31
図版 2	A区近代遺構検出状況 手前が南東	B区近代遺構検出状況 手前が南東	32
図版 3	1号井戸・1号側溝検出状況 南西から	1号井戸・1号側溝検出状況 北東から	33
	1号側溝蓋石除去後 北東から		
図版 4	1号建物S7～S15検出状況 北から	1号建物S7～S12検出状況 南から	34
	1号建物S29・S43・S44・S50検出状況 南から		
図版 5	1号井戸発見状況	表土除去後の1号井戸 南から	35
	1号側溝検出状況 北東から	1号建物S13～S15検出状況 南から	
	1号建物S49検出状況 南西から	1号建物S32検出状況 北東から	
	1号建物S29検出状況 北西から	1号建物S29半裁状況 北西から	
図版 6	2号建物S34～S36・S38・S41・S55・S56検出状況 西から		36
	2号建物S55・S56検出状況 東から	2号建物S57・S58・S59検出状況 南から	
図版 7	2号建物S33検出状況 北から	2号建物S34検出状況 西から	37
	2号建物S35検出状況 東から	2号建物S35根石検出状況 西から	
	1号土坑検出状況 南から	2号土坑検出状況 北から	
	1号・2号埋め桶検出状況 東から	1号埋め桶完掘状況 東から	
図版 8	1号側溝出土遺物	1号建物出土遺物	38
図版 9	2号建物出土遺物	1号土坑出土遺物	39
	2号土坑出土遺物	3号側溝出土遺物	
図版10	4号土坑出土遺物	1号埋め桶・2号埋め桶出土遺物	40

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査にいたる経緯

佐伯市は大分県の南端に位置し、東は豊後水道を望み、北は津久見市と臼杵市、西は豊後大野市、南は宮崎県延岡市と接している。平成17年に1市8町村が合併し、903.4平方キロメートルという九州一広大な市域に約75,000人の市民が住んでいる。

これまで佐伯市は大分県南の中核都市でありながら、地域の歴史や文化を総合的に紹介する施設を有していなかった。一方で佐伯市には近世の佐伯藩主毛利家の遺品をはじめ多種多様な文化財があり、それらを展示する資料館の必要性は以前から指摘されてきた。

昭和63年に当時の社会教育課が実施した生涯学習アンケートの結果をもとに文化財係が新設され、平成8年に武家屋敷地の一角を資料館用地として購入した。平成10年には資料館での展示を前提として毛利家資料の寄託を受け、平成10年度から14年度にかけて資料の調査を行った。後に武家屋敷地を資料館とする計画は撤回され、平成16年度に美術館建設予定地だった三の丸下の駐車場に美術館と資料館を併設するという方針が浮上した。平成17年には市町村合併により新佐伯市が誕生し、合併した市町村をも含む、新たな資料館

構想が求められることとなった。

平成19年、地元の郷土史研究グループから旧毛利家邸宅である料亭池彦の活用についての陳情があり、池彦と隣接の三余館をあわせて歴史資料館とする検討を開始した。翌年から用地交渉を行い、平成21年に用地買収を完了し、ここに至って歴史資料館建設事業がスタートした。

この時に料亭池彦を解体して歴史資料館を建設し、三余館と連結して利用する計画が示された。後述のように池彦の敷地は近世以降の佐伯の中心的役割を果たした地区の一部である。藩主家の居宅や藩の役所、近代以降も町役場や市庁舎であった経緯があり、池彦の地下にはそれらの遺構が存在する可能性があった。

建設に先立つ埋蔵文化財調査として、池彦解体工事の立会調査を行い、鉄骨基礎によって遺構が破壊されている箇所が多い一方で、敷地の一部には近代以前の遺構が残されていることが予想された。そのため、さらに確認調査を実施したところ、敷地内に近代以前の井戸・石列・礎石を検出した。この結果をもって本調査が必要と判断し、平成22年度に発掘調査を実施した。

### 《参考資料》

佐伯市教育委員会2010 佐伯市歴史資料館（仮称）基本構想・基本計画

## 第2節 調査体制

調査は以下の体制で実施した。

### 【調査主体】

佐伯市教育委員会

### 【調査事務】

佐伯市教育委員会文化振興課（平成21～23年度）

竹中 伸吾（文化振興課長）（平成21年度）

河野 宜弘（文化振興課長）（平成22～23年度）

大石 定廣（文化振興課参事）（平成21年度）

今山 勝博（文化振興課課長補佐）（平成23年度）

（文化振興課係長）（平成21～22年度）

吉武 牧子（文化振興課係長）（平成23年度）

（文化振興課主査）（平成21～22年度）

福田 聡（文化振興課主任）（平成23年度）

（文化振興課事務員）（平成21年度～22年度）

五十川慎也（文化振興課嘱託職員）（平成21年度～23年度）

佐伯市教育委員会社会教育課（平成24～26年度）

福嶋 裕子（社会教育課長）（平成24年度）

清家 隆仁（社会教育課長）（平成25～26年度）

今山 勝博（社会教育課課長補佐）（平成24年度）

淡居 宗則（社会教育係長）（平成25～26年度12月）

（社会教育総括主幹）（平成26年度1月～3月）

吉武 牧子（社会教育係長）（平成24～26年度12月）

（社会教育総括主幹）（平成26年度1月～3月）

福田 聡（社会教育課主任）（平成24～26年度）

五十川慎也（社会教育課嘱託職員）（平成24～26年度）

## 第3節 地理的・歴史的環境

### 【地理的環境】

佐伯市は東の海岸部を日豊海岸のリアス式海岸、東と南の山間部は九州山地の一角をなす山々に囲まれ、険しい地形が多い。一級河川・番匠川は佐伯市の西部に水源を発し、東部の佐伯湾に注ぎ込んで河口付近に小さな平野を形作っている。内陸は山に囲まれる一方

で海に開けており、豊後水道を挟んで四国とも近い。現在の佐伯市街地から大分市、延岡市への道のりが約60km、四国八幡浜へも海路約60kmの距離である。

佐伯城下町は番匠川河口の扇状地を埋め立てて形成された低地に成立した近世遺跡である。近代以降にさらに埋め立てが進行し、港の位置も移ったために現在は海岸からやや遠ざかっているが、当時の佐伯城下町はいくつ



もの船着き場を持ち、豊後水道に面した港湾都市として発展した。番匠川に接する港周辺が経済の中心となり、藩政は城下町を見下ろす佐伯城とその麓の役所群で執り行われた。

#### 【歴史的環境】

複雑で急峻な地形の多い佐伯では、番匠川やその支流の周辺で小規模な集落が展開していた。旧石器・縄文時代の遺跡は主に山間部の河川に面した丘陵に展開するものが多く、早期の佐伯門前遺跡も同様の立地である。弥生時代以降は番匠川の下流域に集落が形成される傾向にあるが、下城遺跡や長良貝塚、白湯遺跡に見られるように、貝塚を伴う事が多い。貝塚からは獣骨・魚骨・貝類が出土し、当時の佐伯地方における生業が窺える好資料である。古墳時代になると、番匠川の河口付近や遠浅の海に浮かぶ島嶼部に小規模古墳が築かれる。檜野古墳の溝から出土した土師器は宮崎平野の形式的特徴を備えており、東島古墳の石棺は佐賀関半島周辺で産出する石材で造られている。これらの遺跡は南北の地域との交流に支えられた小首長層の存在を示している。奈良・平安時代には律令制下の海部郡穂門郷に属していたとみられる。平安時代には「佐伯院」の地名も文献に登場し、墨書土器を出土した汐月遺跡周辺が比定地として有力視されている。平安後期以降に佐伯を荘園として開発し、勢力を伸ばした一族が佐伯氏である。彼らは番匠川や豊後水道で活動する水軍を擁し、水上の交通や交易に力を発揮したと考えられる（飯沼2007）。番匠川の下流域には十三重塔や上小倉磨崖石塔をはじめ

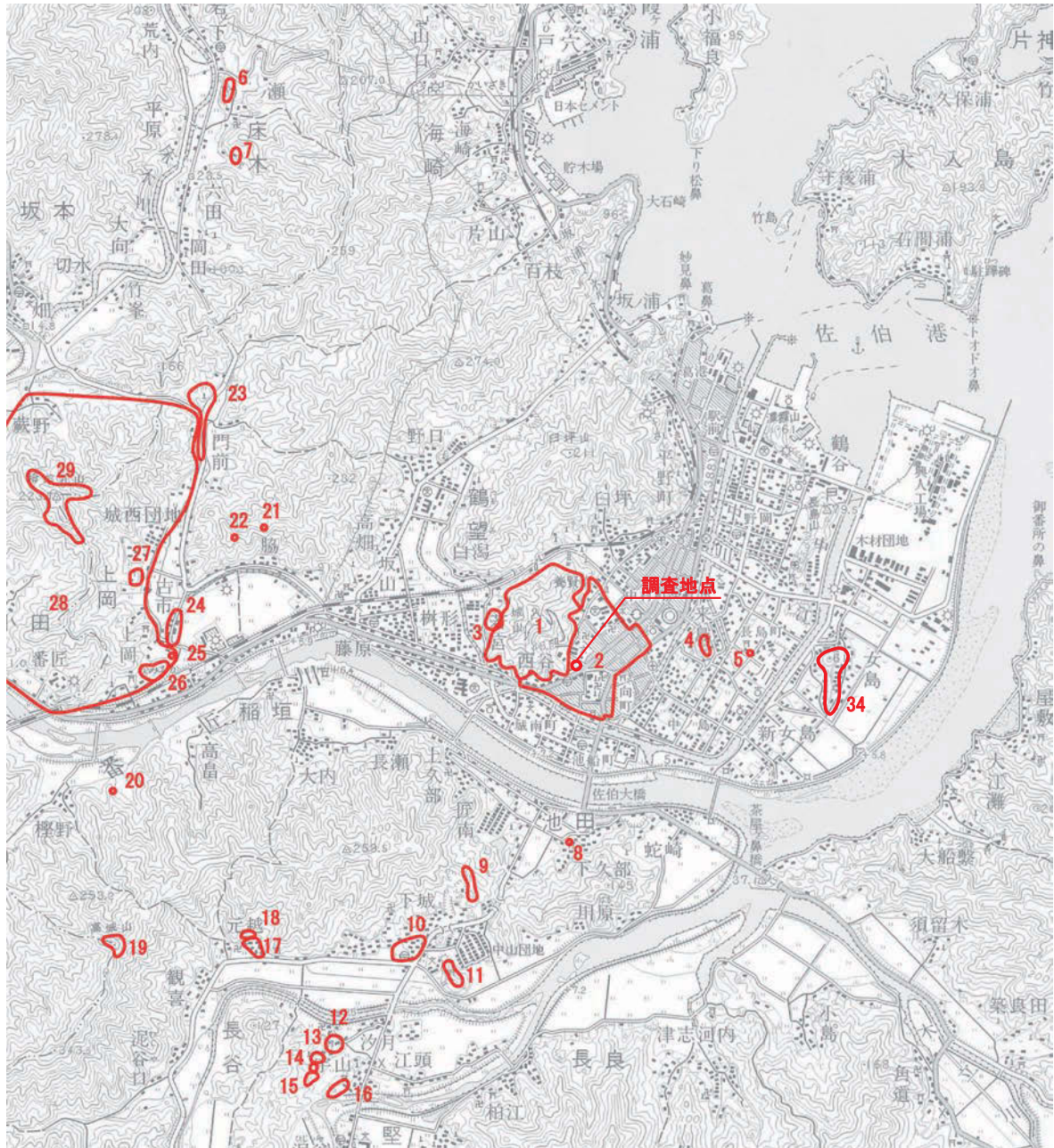
#### 【参考文献】

- 飯沼賢司 2007「海と山と古代の道」『図説海部・大野・竹田の歴史』郷土出版社  
佐伯市教育委員会 1974『佐伯市史』  
佐伯市教育委員会 1994『梅牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』  
佐伯市教育委員会 2003『佐伯城下町遺跡 山中家屋敷跡・竹中家屋敷跡』  
佐伯市教育委員会 2010『梅牟礼遺跡』  
大分県教育庁埋蔵文化財センター 2005『津久見門前遺跡 瀬戸遺跡 佐伯門前遺跡』

佐伯氏に関する文化財が多く、佐伯氏の拠点はこの地にあった。15世紀前半頃には梅牟礼城を築くが、文禄2年（1593）主家の大友氏の改易に伴って佐伯を去り、約400年に及ぶ支配は終焉を迎えた。

佐伯氏が去ったのち、慶長2年（1601）に新たな統治者として毛利高政が入部し、近世の佐伯藩が始まる。高政は番匠川河口の八幡山に居城となる佐伯城を築き、その東に広がる扇状地を埋め立てて城下町を建設した。幾度かの再編を経て、18世紀頃には佐伯湾・豊後水道を見下ろす佐伯城の東南裾に藩庁機能を集約し、これを武家地で囲む。さらに東に町人地を配し、番匠川に接する南側を流通・経済の中心とする都市景観が完成した。藩領は現佐伯市から岡藩領であった宇目を除き、現津久見市南部を加えた範囲に相当する。石高2万石の小藩であるが、リアス式海岸の浦々に多くの良港を抱え、海産物による収入も藩財政を大いに支えていた。毛利家の一族による統治は明治維新を迎えるまで続き、維新後も旧藩主が佐伯で生活するなど、佐伯とのつながりは続いた。

今回の調査地は、こうした毛利家の藩政を担った地区の一部である。18世紀前半頃は上級家臣の屋敷地であったものが、19世紀には役所施設となり、近代に入ると旧藩主家の邸宅と町庁舎が建てられる。その後邸宅は民間に払い下げられるも、戦時中には軍関係者のための施設に利用される事もあった。隣接地も大正期以降は町庁舎、市庁舎と変遷し、公的な性格が強い地区と言える。



1. 佐伯城跡	2. 佐伯城下町	3. 白濁遺跡	4. 萩山遺跡群
5. 宝剣山古墳	6. 大友山砦跡	7. 瀬戸遺跡	8. 岡ノ谷古墳
9. 中山砦跡	10. 下城遺跡	11. 八幡山城跡	12. 長良貝塚
13. 上ノ台館跡	14. 上ノ台遺跡	15. 汐月遺跡	16. 宇山城跡
17. 元越遺跡	18. 長谷山際遺跡	19. 高城跡	20. 檜野古墳
21. 三上寺跡	22. 二上寺跡	23. 佐伯門前遺跡	24. 古市遺跡
25. 十三重塔	26. 木戸城跡	27. 曳地館跡	28. 梅牟礼遺跡
29. 梅牟礼城跡	30. 小田山城跡	31. 小田山館跡	32. 上小倉横穴群
33. 平城跡	34. 女島山古墳群		

第1図 周辺遺跡地図 (S=1/50,000)

## 第2章 調査の成果

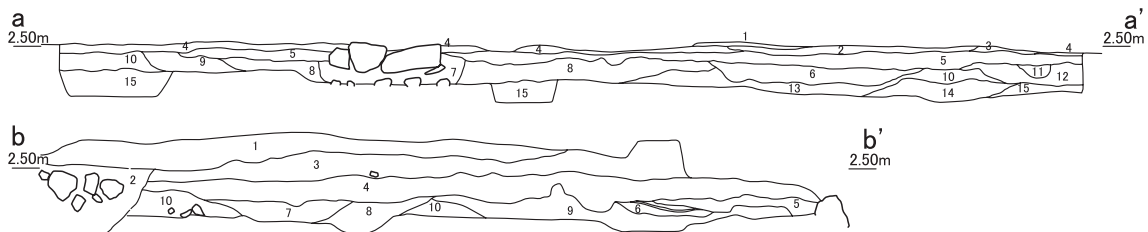
### 第1節 調査の概要

調査は旧料亭池彦の土地をA区、その北東の駐車場をB区として行った。A区B区ともに近世中期には上級家臣の屋敷地、近世末頃になると三府役所と呼ばれる役所となる。明治に入ると土地が分割されて、それぞれの経緯をたどることとなる。

A区は藩主毛利家の邸宅となり、昭和初期までには民間に払い下げられ、料亭池彦として現代まで続いていた。資料館の建設のために池彦を解体中に石敷井戸が発見され、発掘調査の結果、建物基礎や石敷井戸に伴う石組側溝を検出した。これらの遺構には近代の遺物が伴い、明治期の毛利家邸宅に関する遺構であると考えられる。建物基礎や石敷側溝な

どには検出状況に違いがあることから時期差が認められる。

B区は大正5年には佐伯町役場となる。その後佐伯市庁舎に建て替わり、駐車場となって現在に至っている。A区の調査と併行して駐車場の舗装を除去すると、ほぼ全面が近代の整地層に覆われていた。整地層の上面には近代末頃と見られる大規模な建物基礎が広がり、現代の攪乱（廃棄土坑）が多く見られる。また、敷地の北東には近代から現代まで機能していた石組側溝がある。これら近代以降の遺構と整地層の下位から、わずかに残る遺構を検出した。埋め桶・土坑・側溝などであり、近世末から近代初頭頃の遺構であると考えられる。



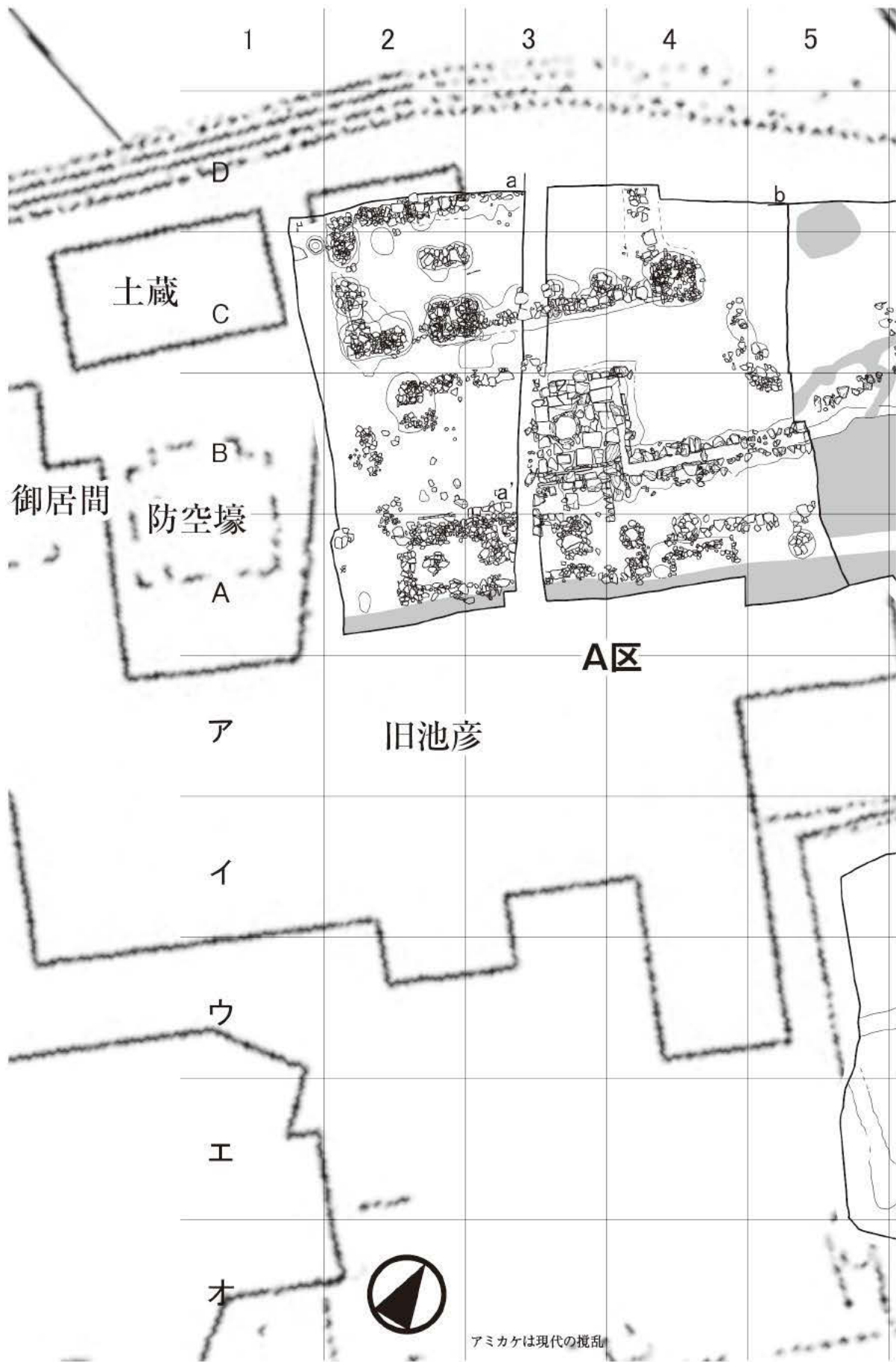
#### a-a' 土層注記一覧

番号	土色	所見
1	明黄褐色土	しまり非常に強く粘性なし。小礫混。叩き土。
2	明赤褐色土	しまり強く粘性弱い。やや砂質。
3	明黄褐色土	しまり非常に強く粘性なし。
4	暗褐色土	しまりやや強く粘性弱い。褐色礫多い。
5	暗茶褐色土	しまりやや強く粘性弱い。小礫を多く含み、炭を少量含む。
6	暗褐色土	しまり・粘性やや強い。礫を多量に含み、褐色ブロックを少量含む。
7	暗褐色土	しまりやや強く粘性弱い。褐色礫を含む。
8	茶褐色土	しまりやや強く、粘性なし。褐色礫多量に含む。
9	褐色土	しまり強く粘性弱い。褐色小礫多く含む。
10	茶褐色土	しまりやや強く粘性なし。褐色礫多量に含む。
11	暗褐色土	しまり強く粘性弱い。礫多く含む。
12	暗褐灰色土	しまりやや強く粘性弱い。小礫含む。やや砂質。
13	褐色土	しまり弱く粘性なし。褐色ブロック含む。砂質強い。
14	暗灰色土	しまり弱く粘性弱い。礫・褐色ブロック少量含む。砂質強い。
15	黒褐色土	しまりやや強く粘性弱い。小礫含む。炭をやや多く含む。

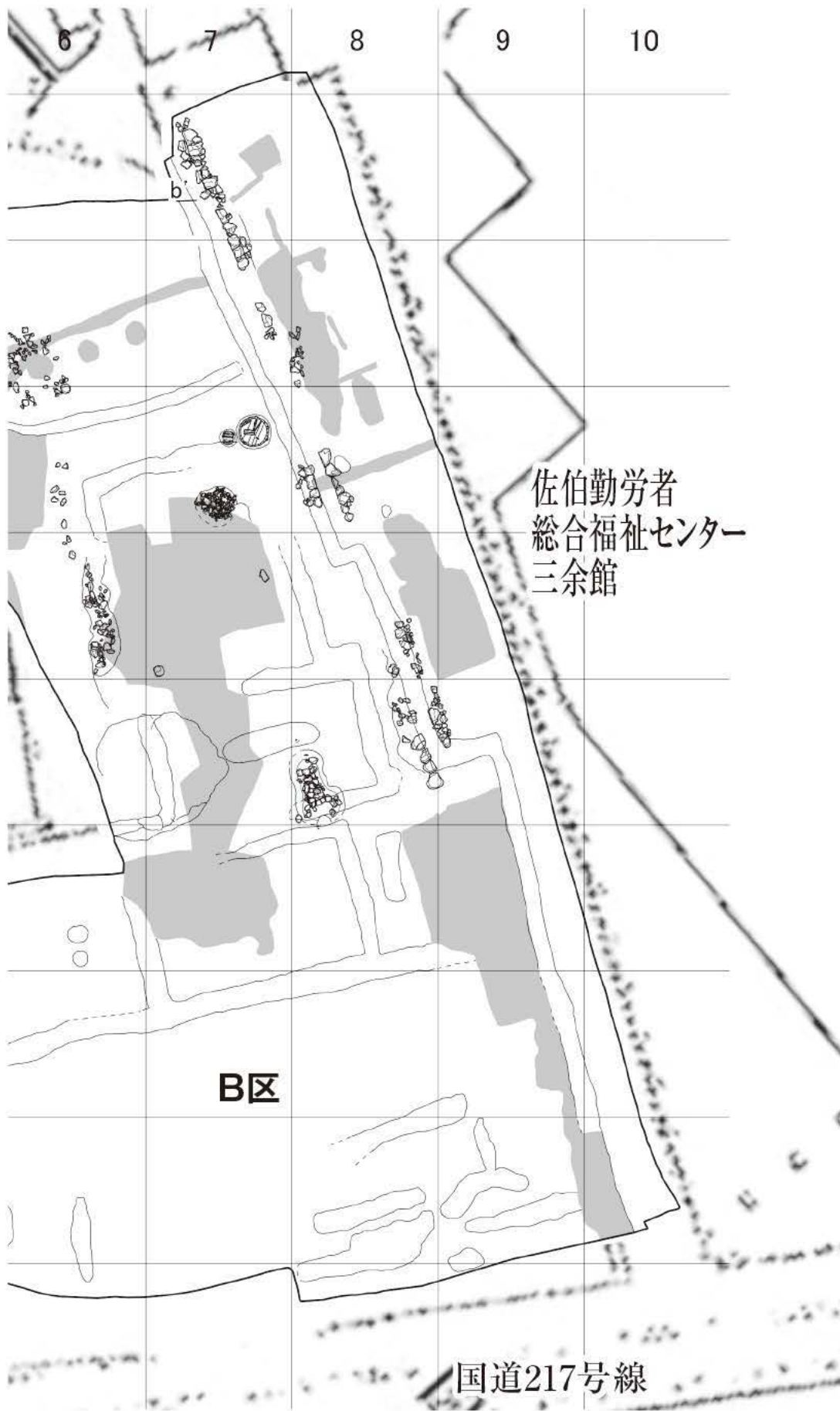
#### b-b' 土層注記一覧

番号	土色	所見
1	暗褐色土	しまり・粘性弱い。礫・漆喰片含む。
2	暗褐色土	しまり・粘性弱い。50cm以上の礫多く含む。現代ゴミ含む。
3	茶褐色土	しまりやや強く粘性弱い。礫・炭含む。
4	暗黄褐色土	しまり強く粘性やや弱い。小礫・褐色ブロック含む。
5	茶褐色土	しまり・粘性弱い。小礫・炭含む。焼土粒少量含む。
6	赤褐色土	しまりやや強く粘性弱い。焼土層。
7	暗褐色土	しまり強く粘性弱い。褐色ブロック多く含む。小礫含む。
8	褐色土	しまりやや強く粘性やや弱い。褐色礫多量に含む。
9	黒褐色土	しまり・粘性弱い。小礫・褐色礫含む。炭少量含む。やや砂質。
10	黒褐色土	しまり・粘性やや弱い。小礫・褐色礫含む。炭含む。やや砂質。

第2図 土層断面図



第3図 警露館跡遺構配置図 (1/200)



佐伯勤労者  
総合福祉センター  
三余館

**B区**

国道217号線

## 第2節 A区の調査

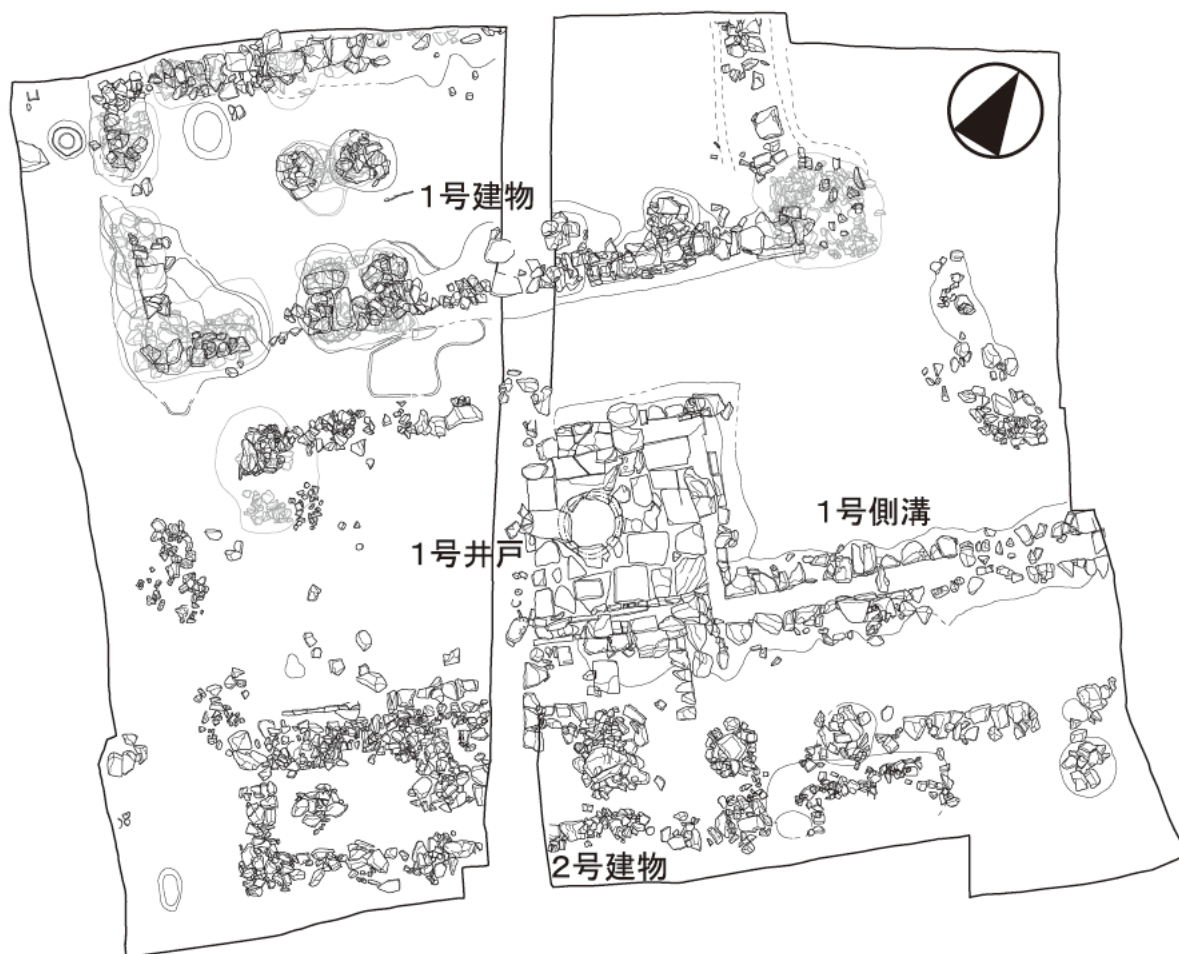
A区は池彦の建物解体時に井戸を確認し、発掘調査の結果、井戸の周囲に広がる近代の整地層上面に側溝・建物基礎を検出した。建物基礎は礎石の下位に沈下対策と見られる石組がある。また、近代整地層の掘削中にも建物基礎を検出し、こちらはより古期に遡る可能性がある。礎石と布基礎で構成されるが、大半を現代の攪乱によって失っている。

A区全体として細かな整地層が非常に複雑に入り組んでおり、建築物の頻繁な建替えがあったと考えられる。調査では表土をI層、井戸や建物礎石などを検出した面を第II層、整地層を第III層、その下位で検出した建物基礎の検出層と整地層を第IV層、第V層と大別した。

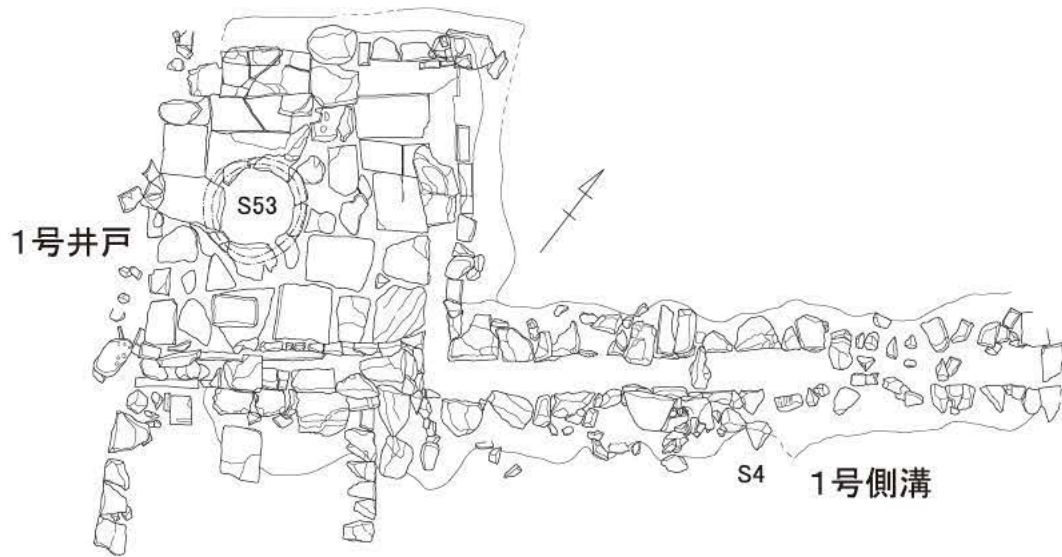
### 1号井戸（第5図）

建築物の解体時に宴会場の床下で発見した井戸である。検出時には井戸周囲に薄いモルタルが貼られていた。

直径80cmの円形石組井戸で、周囲には板石を敷き、三和土で隙間を埋めて固定する。井戸の石組には硬砂岩、周囲の石敷きには凝灰岩が使用されるが、石敷きの石材は厳密に使い分けられてはいないようである。井戸の縁に残る痕跡からは、三和土で固定された井筒があったことが分かる。井戸の深さは3m以上あり、発掘調査時も水量は豊富であった。調査後に移設を検討するため、石敷きは除去せず、検出時の状態で保存した。一部南東側にも石列と整地が広がっていたが、その先は現代の攪乱によって大規模に破壊されており、遺構は確認できない。



第4図 A区検出遺構配置図 (S=1/120)



第5図 1号井戸・1号側溝平面図 (S=1/80)



第6図 1号側溝出土遺物 (S=1/3)

### 1号側溝（第5図・第6図）

1号井戸の周囲を囲み、北東方向に排水する側溝である。井戸が閉じられた時点では北西と南東の側溝には凝灰岩製の蓋があったと見られ、一部は割れた状態で検出した。

1号井戸周囲の側溝は、南東側では断面コ字型に加工した凝灰岩である一方で、北側は礫やレンガを流用し、粗雑な印象である。北東へ延びる部分は30～50cmの礫の面を合せて側溝の壁とし、底面には三和土を貼って防水する。

側溝内の出土遺物は、近世末頃から戦前にかけてのものである。小坏は1～3のように脚のつくものがある。近代以降のものであろう。5は通水記念と書かれた小坏である。『佐伯市史』（佐伯市史編さん委員会1974）によると、昭和8年に佐伯小学校校庭で上水道通水式が挙行されたとあり、この時のものであろうか。6の文様は麒麟と鳳凰であろう。高台内に刻印があるが、文字は解読できなかった。9～11は近代の皿であろう。15は陶製の酒瓶。月形は佐伯市直川の地名である。これら図化した資料のほか、側溝内からは昭和戦前頃の薬瓶やビール瓶なども出土した。近代を通じて修理されつつ使用されたと思われる。小坏・小碗や酒瓶など、特に飲食に関する資料が多い。

### 1号建物（第7図・第8図）

調査区の北西で検出したもので、北西の一部は調査区の外側に続いている。現代の整地層除去後に第Ⅱ層上面で礎石と根石S7～S12を検出した。建物の南東で検出したS13～S15も検出面と軸を同じくしており、一体の遺構と判断して掲載する。長軸は布基礎状に礫を連続して設置し、南東側はその内側にも礎石が並んでいる。連続して設置された礫は建物の外側を向いて面を揃えている。掘方は明瞭なものではなく検出は困難であったが、おおよそ建物の外周に沿った浅い布堀状のものである。

また、周辺の整地層掘削後に第Ⅲ層中に

S29～32・S43～S50を検出した。これらはS7～S13の直下であり、発掘調査時には地下水位よりわずかに高いレベルにある。検出位置が上位の礎石と一致することから、軟弱な地盤への対策としてあらかじめ施された地業の一種であろう。こうした地業は建物の南西側に顕著である。

出土遺物は基本的に近世から幕末・明治頃のものである。19～23の碗は18世紀末から19世紀前半におさまるものであろう。24は口縁端部が露胎となり、蓋付きの鉢であろう。30は底部中央に孔があり、植木鉢と思われる。28は中世に遡る土師質土器坏である。

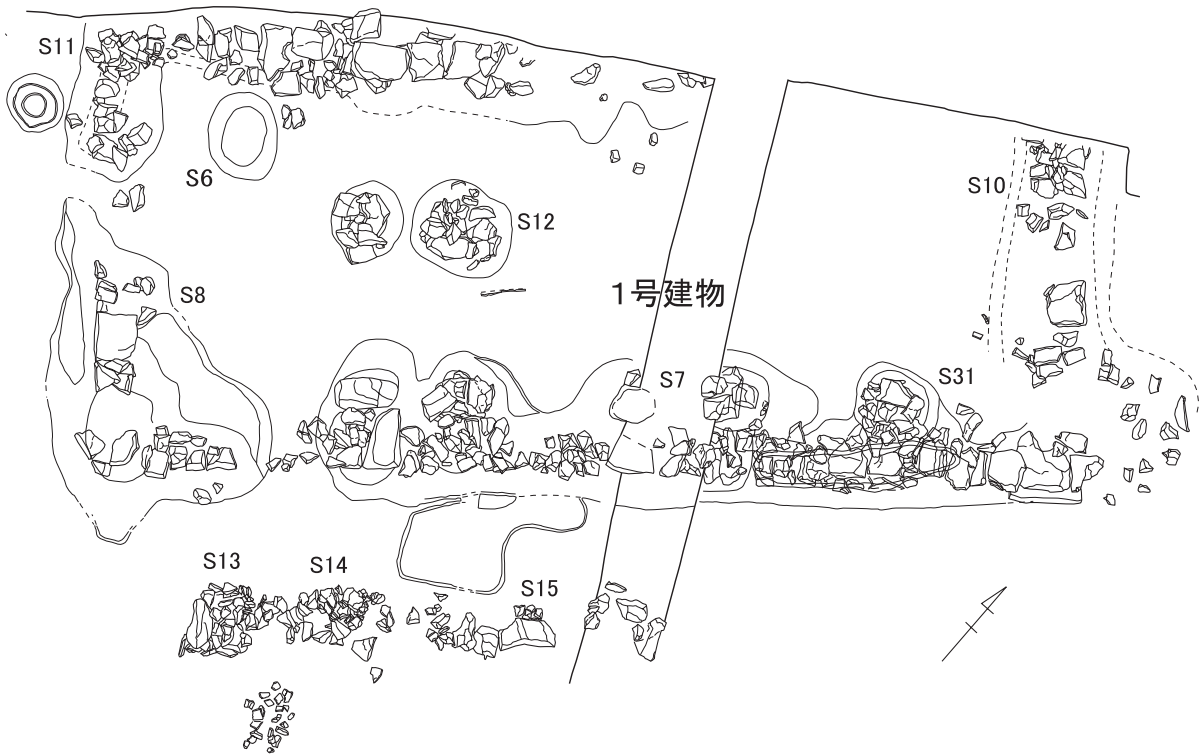
### 2号建物（第10図・第11図）

1号井戸・1号側溝・1号建物を検出したⅢ層を掘削中にその下部から多量の礫の密集を確認し、周囲を掘り下げることで検出に至った。特にS36は1号井戸に伴う整地層に覆われていた。こうした検出状況から、1号井戸や1号建物より古期の遺構と考えられる。

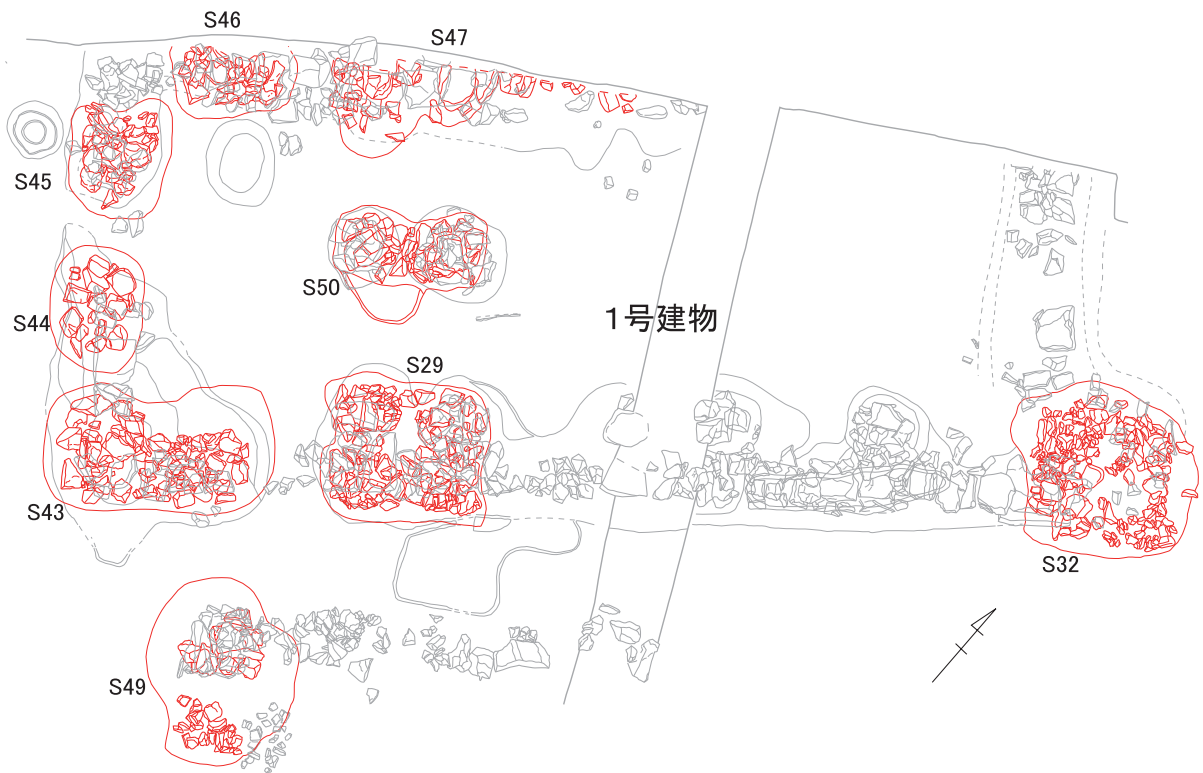
S34・S36は礎石が残っていたが、その他は根石等の下部構造のみの検出である。S55は礫の密集で、礎石S41・S36を囲むように拳大以上の礫が集中する。布基礎の栗石であろうと考える。これらの遺構の掘方は確認できないものも多い。また、S57～S59は一体のものとして掲載した。S57は焼土を含む整地層、S58は整地層中で検出した礫、S59は灰溜まりである。継続的に火を使う施設の跡と見られ、かまどがあった可能性が高い。なお、2号建物の南西は現代の改築に伴う掘削によって破壊されている。そのため、今回の調査で検出できた遺構は建物のごく一部である。

遺物は1号建物と同様に近世末～明治頃の資料を含む陶磁器である。32は器壁の薄い小坏の内面に青で上絵付けする。幕末～明治のものであろう。このほかは18世紀末から19世紀初頭頃の資料である。

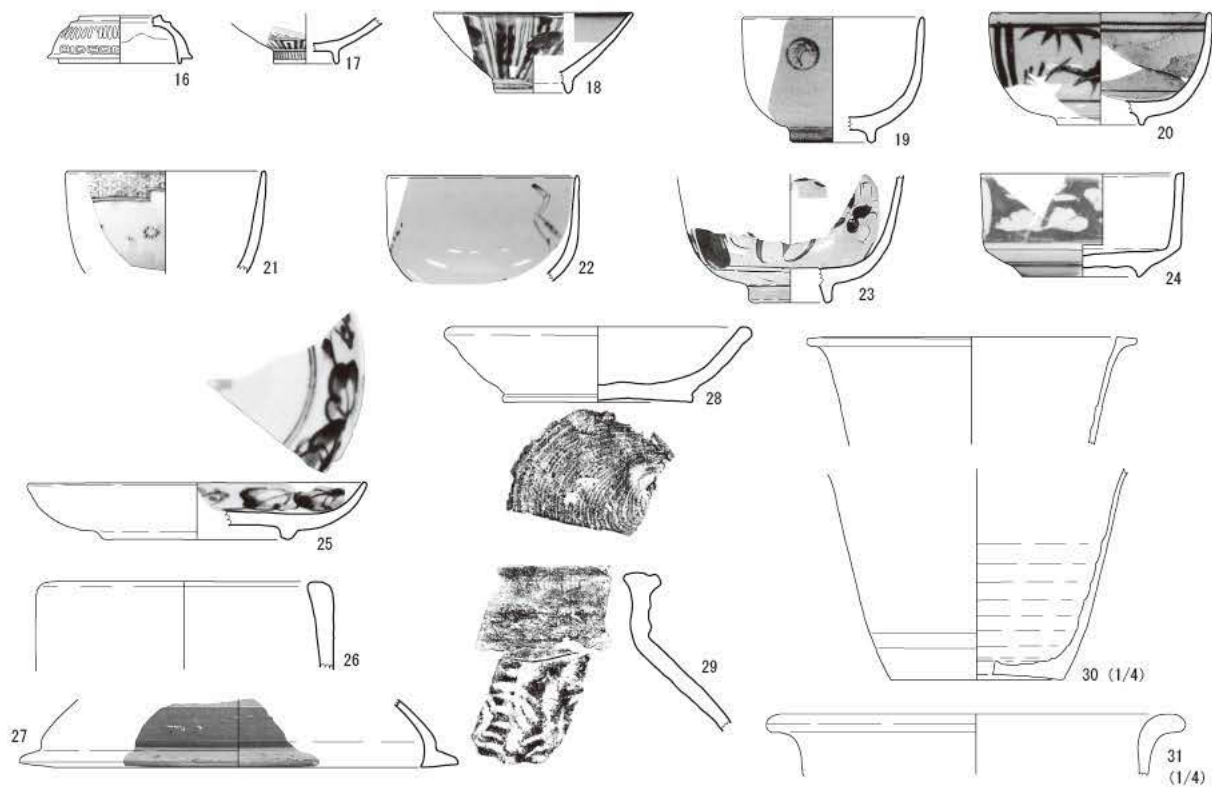




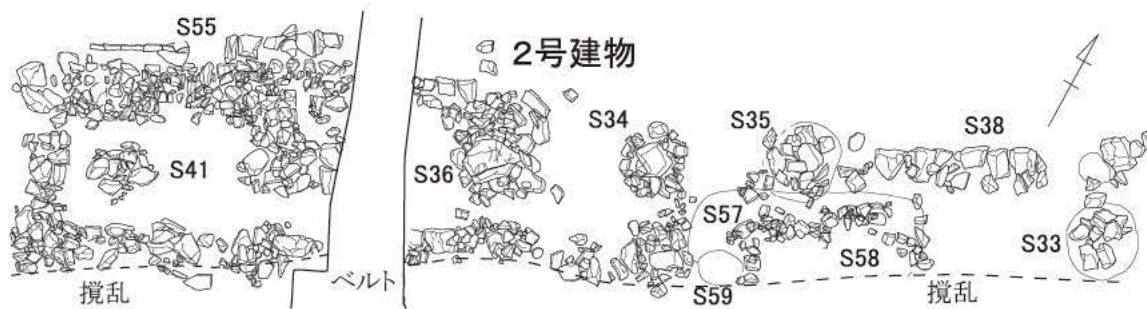
第7图 1号建物礎石平面图 (S=1/80)



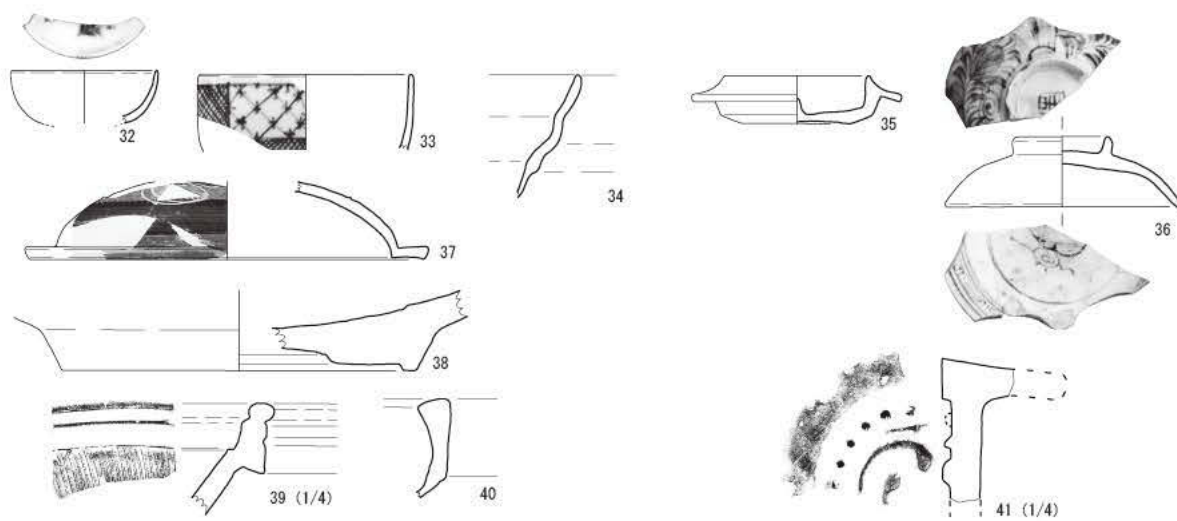
第8图 1号建物基础平面图 (S=1/80)



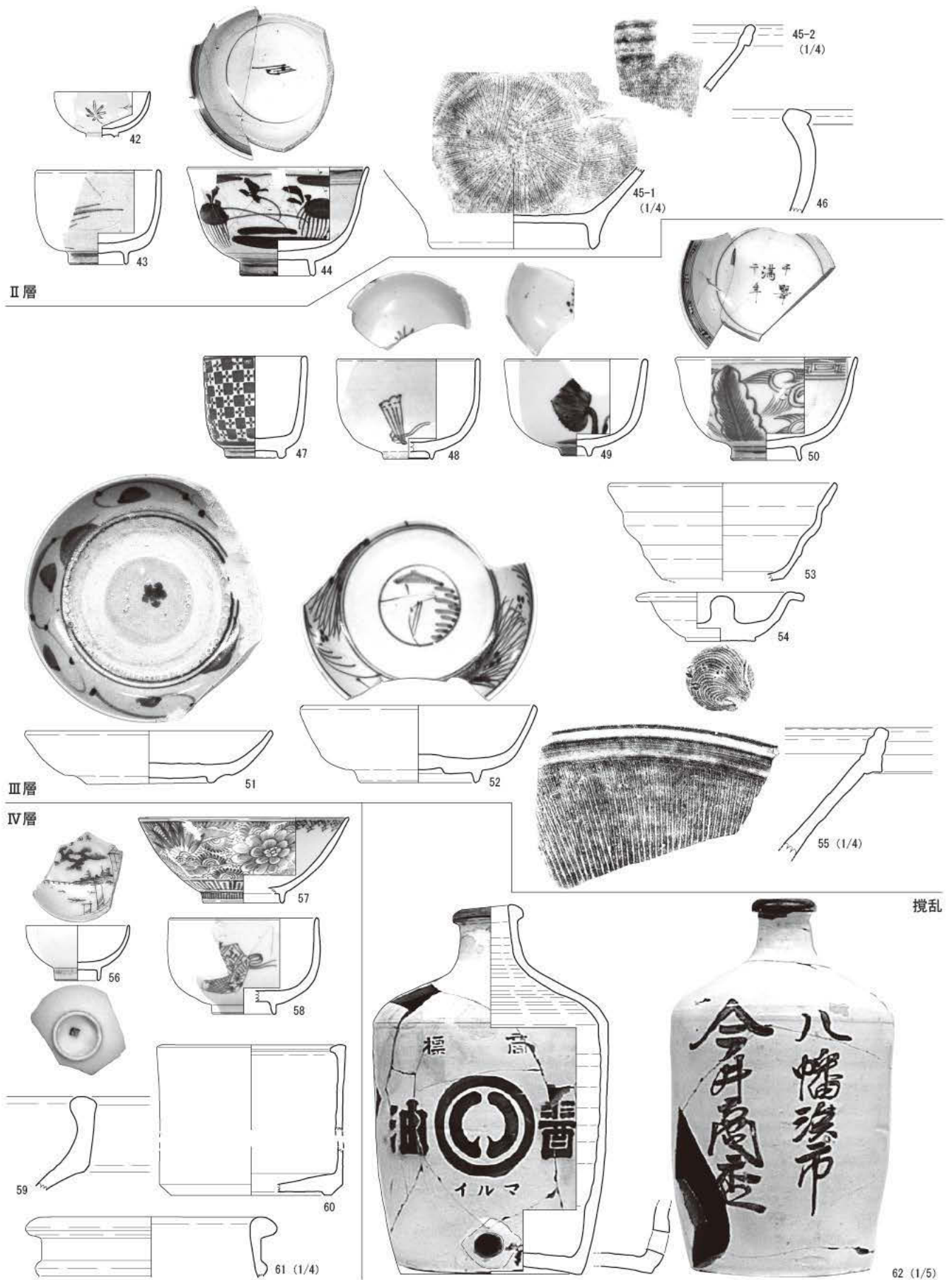
第9図 1号建物出土遺物 (S=1/3)



第10図 2号建物平面図 (S=1/80)



第11図 2号建物出土遺物 (S=1/3)



第12図 A区整地層出土遺物 (S=1/3)

### 第3節 B区の調査

B区は料亭池彦北東の駐車場と里道であったため、事前の確認調査が不可能であった。A区の発掘調査と併行して駐車場のアスファルトを除去したところ、調査区の大部分に近代の整地層と、その上面に大規模な建物基礎が検出された。また調査区に設置されている石組の側溝も同じ整地層にあることが明らかとなった。これらの遺構は近代末頃のものと考えられる。その他にも大小様々な現代の攪乱を検出した。この近代末頃の整地層を除去し、近世末から近代初期にかけての遺構を検出した。いずれも遺構の上半は近代の整地や遺構によって失われていたが、土坑、側溝、埋め桶を検出した。

調査は現代の整地層や舗装をⅠ層、大型の建物基礎を検出した近代整地層をⅡ層、その下位の遺構検出層をⅢ層、Ⅳ層とした。Ⅲ層は調査区北西側に頻繁に見られるが、調査区中央から南東にかけてはⅡ層下位にⅣ層が現れる。

#### 3号建物 (第13図)

Ⅱ層上面で検出し、B区の大半に基礎が広がる。幅80cmほどの溝に礫を充填し、埋土は非常に硬く締まっている。検出面である近代整地層は黄褐色を呈し、B区のほぼ全面に広がり、3号建物のための整地であろうと考えられる。層中の遺物は近世から近代の遺物がわずかに出土し、後述する3号建物と2号側溝を除けば現代の攪乱しか検出しなかったため、かなり現代に近い時期の遺構であると判断した。そのため、記録は遺構の輪郭を記録するに留めた。

なお、3号建物を切る攪乱からは近代から現代の遺物とともに、レンガや板ガラスを使用した窓枠の破片、インク瓶などを確認した。3号建物の解体に伴う廃棄であろう。

#### 2号側溝 (第13図)

前述の3号建物と同様に、B区の大半に広がるⅡ層中に設けられている石組側溝である。A

区の1号側溝とも連結し、クランク状に曲がりつつ南東の国道側に排水する。南東側は現代の側溝が重複して設置されたため、石列の一部を失っている。その他は概ね石列の残りは良好である。一部にはコンクリート片が使用されていたり土管と連結されていたり、改修を受けながら使用されていたと思われるが、発掘調査時には側溝内には泥がたまり、ほとんど機能していなかった。側溝内からは近代から現代までの陶磁器・ガラス瓶等が出土した。先述の3号建物と同様の検出状況から、近代末頃の遺構と判断し、輪郭のみ記録した。

#### 1号土坑 (第14図・第15図)

Ⅱ層下位に検出した土坑。本来の遺構の最下部にあたると思われ、南半分は現代の攪乱によってさらに削平を受けている。土坑内には礫と遺物が多く、廃棄土坑と考えられる。

遺物は主に18世紀後半から幕末・明治頃のものである。63と64はセットになる碗と蓋。幕末頃の資料であろう。70は備前焼の播鉢で、16世紀後葉のものと考えられる。

#### 2号土坑 (第16図・第17図)

近代整地層除去後に検出した土坑である。内部の礫は30cm前後の砂岩で、平坦な面を上に向けて揃えており、意図的に据えられたものである。何らかの施設の基礎だと考えられる。

74は色絵の仏飯器で歪みがある。75は貫通する孔のある焙烙の把手である。

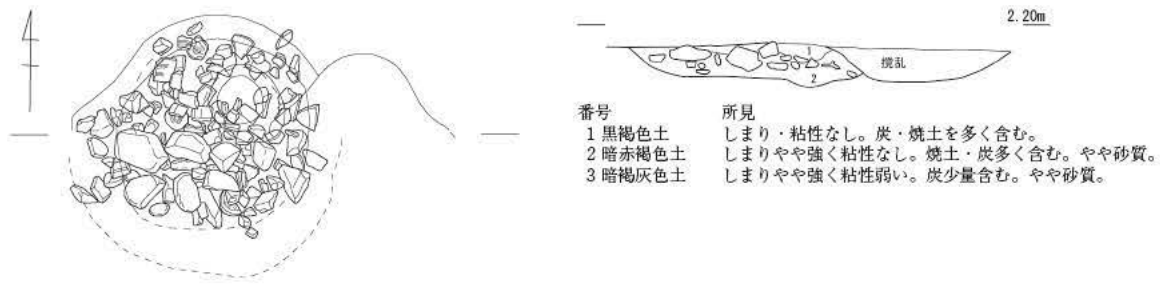
#### 3号土坑 (第13図・第18図)

Ⅱ層の下位に検出した長楕円形の土坑である。遺構の上部にはⅡ層がかなり混入していた。土坑の埋土は淡黒色土で炭化物が混じる。調査期間の事情により遺構実測は上端及び遺構配置図のみとし、可能な限り遺物の取り上げを優先した。

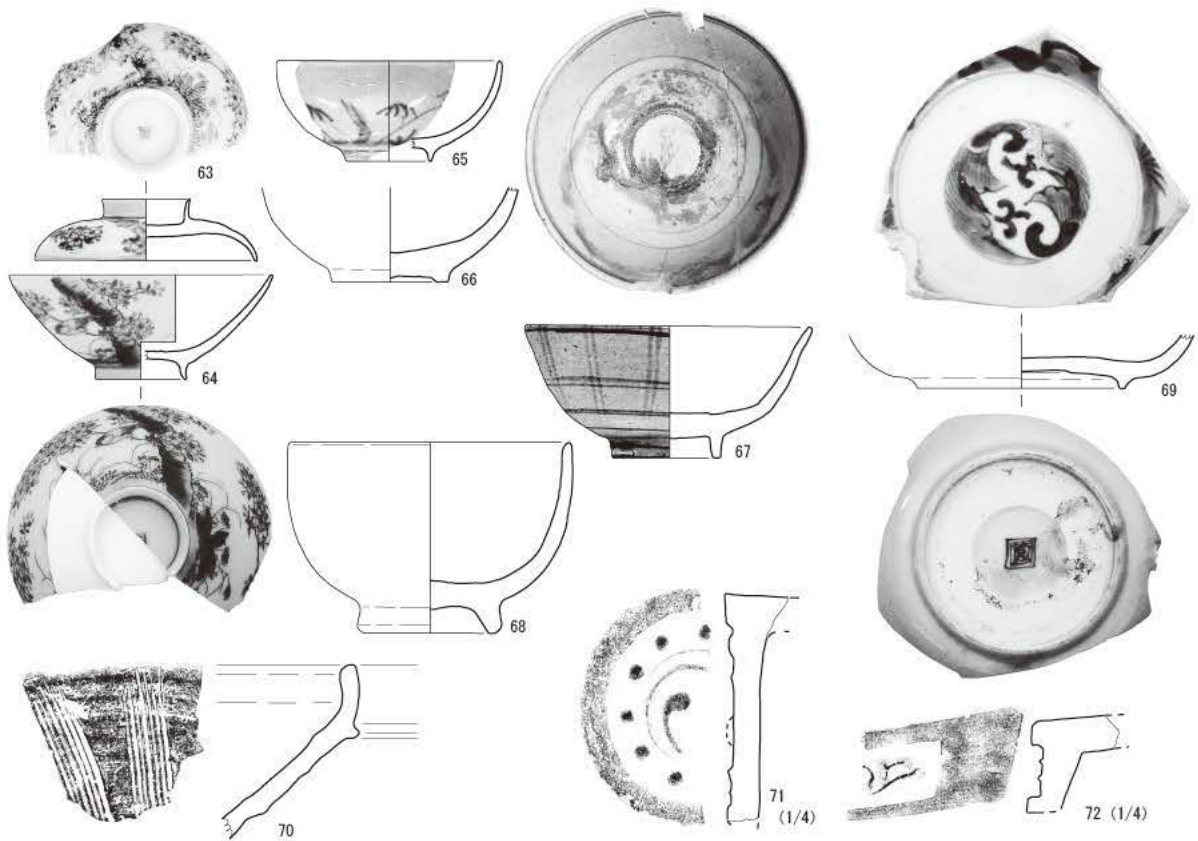
95は口縁端部を釉剥ぎした合子。79は内面銅緑釉で見込みを蛇の目釉剥ぎする陶器皿である。



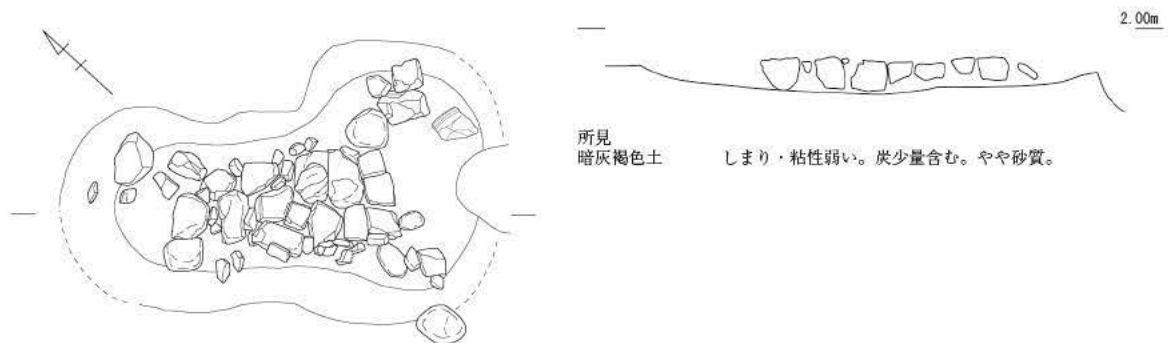
第13図 B区検出遺構配置図 (S=1/200)



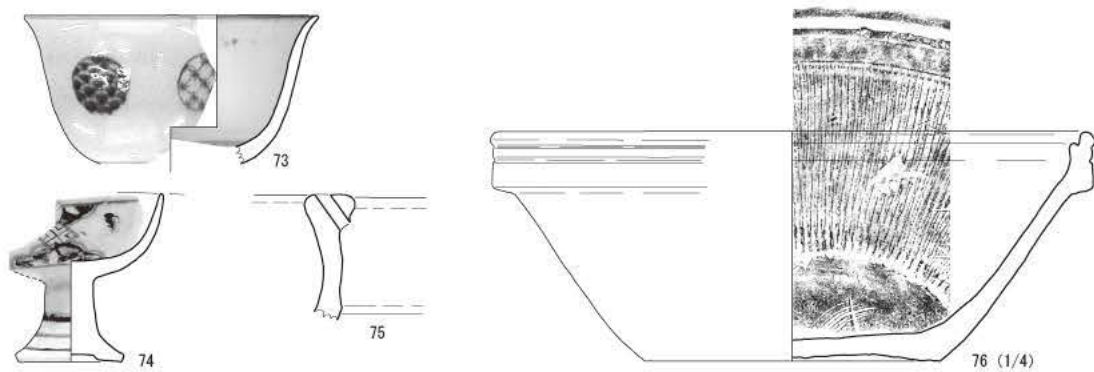
第14図 1号土坑平面図 (S=1/40)



第15図 1号土坑出土遺物 (S=1/3)



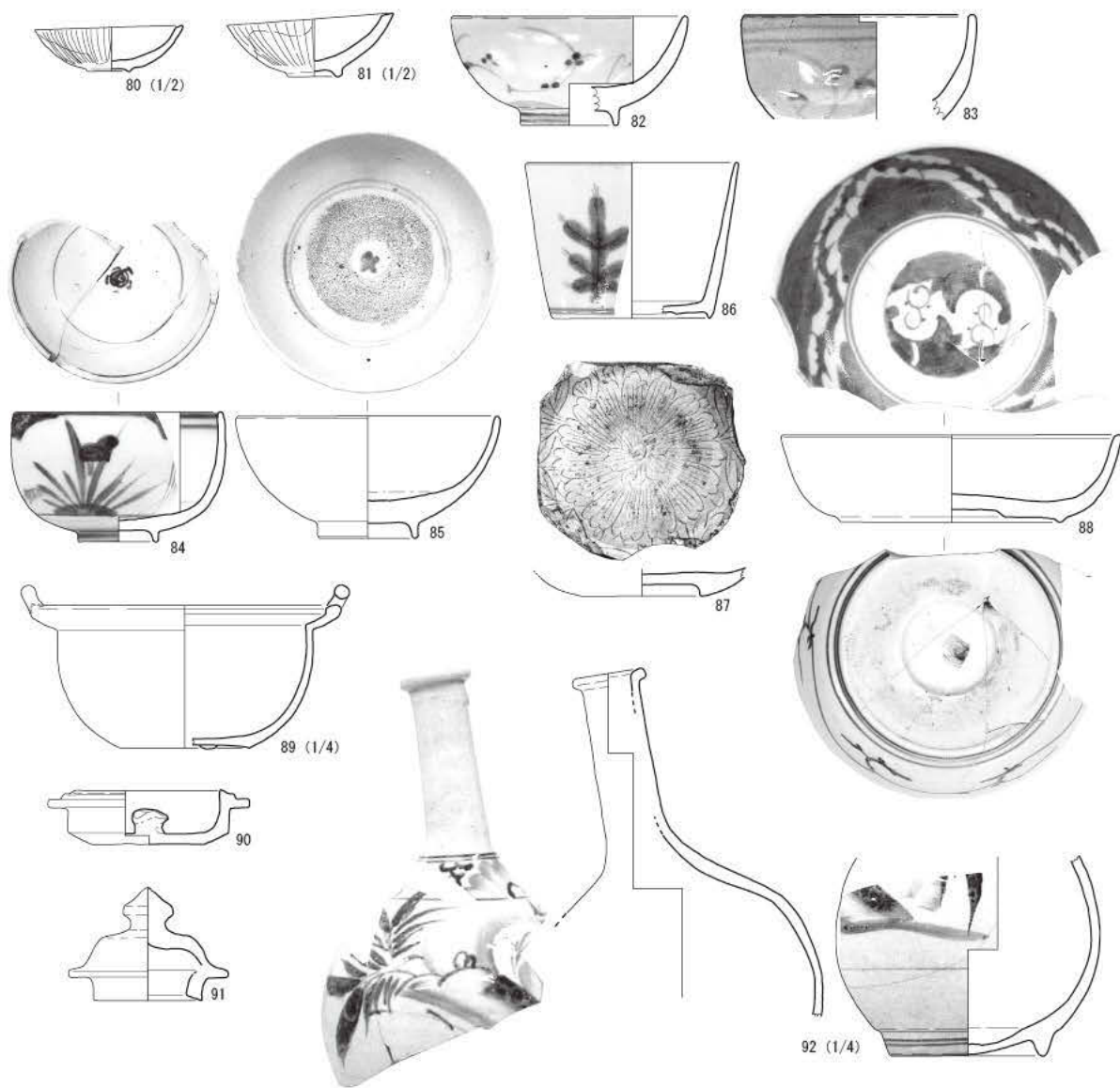
第16図 2号土坑平面図 (S=1/40)



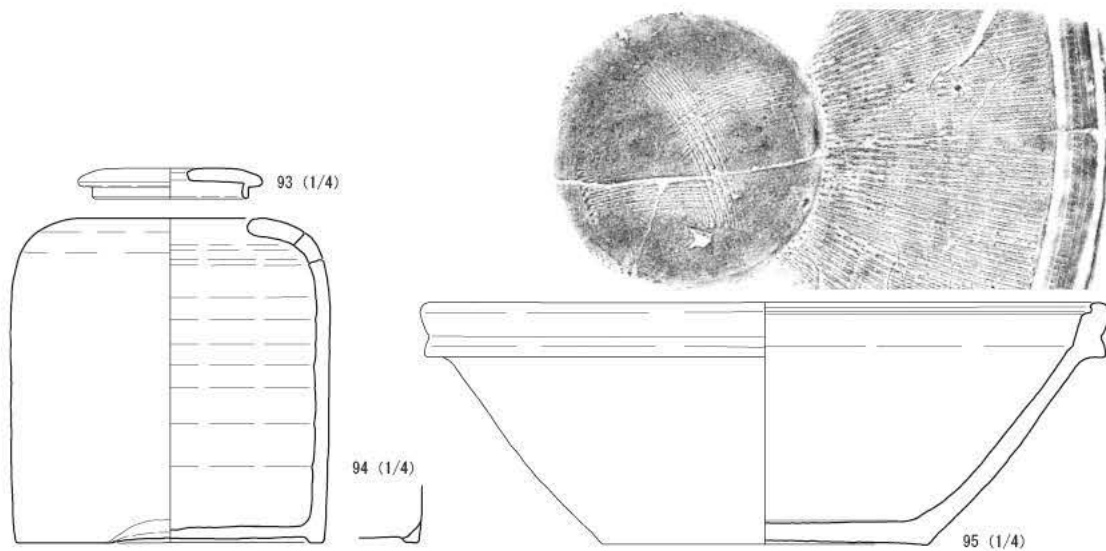
第17图 2号土坑出土遗物 (S=1/3)



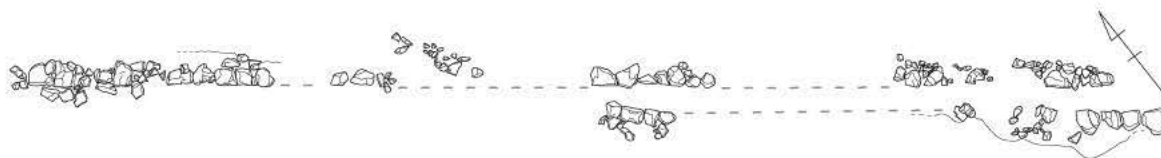
第18图 3号土坑出土遗物 (S=1/3)



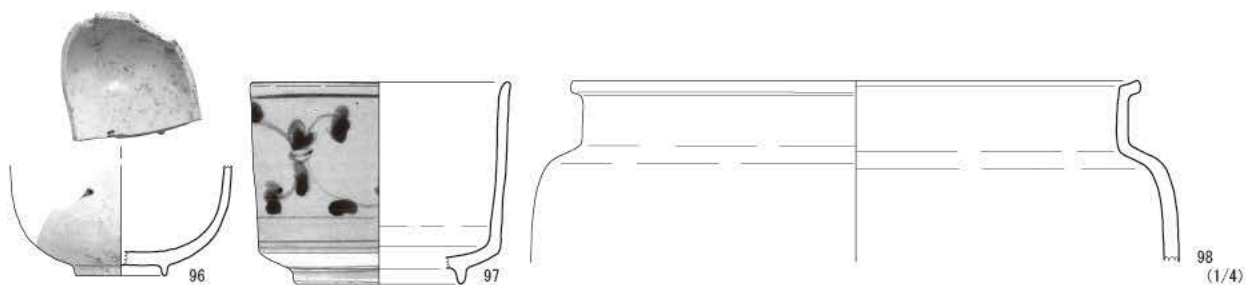
第19图 4号土坑出土遗物 (1) (S=1/3)



第19図 4号土坑出土遺物(2) (S=1/3)



第20図 3号側溝平面図 (S=1/160)



第21図 3号側溝出土遺物 (S=1/3)

#### 4号土坑 (第13図・第19図)

Ⅱ層の下位に遺物が集中する箇所を確認し、周辺を精査してⅣ層上面で検出した。3号土坑と同様に、調査期間の事情によって遺物の取り上げを優先し、遺構実測は上端及び遺構配置図のみである。埋土は暗灰色を呈し、小礫や炭化物を含む砂質土である。

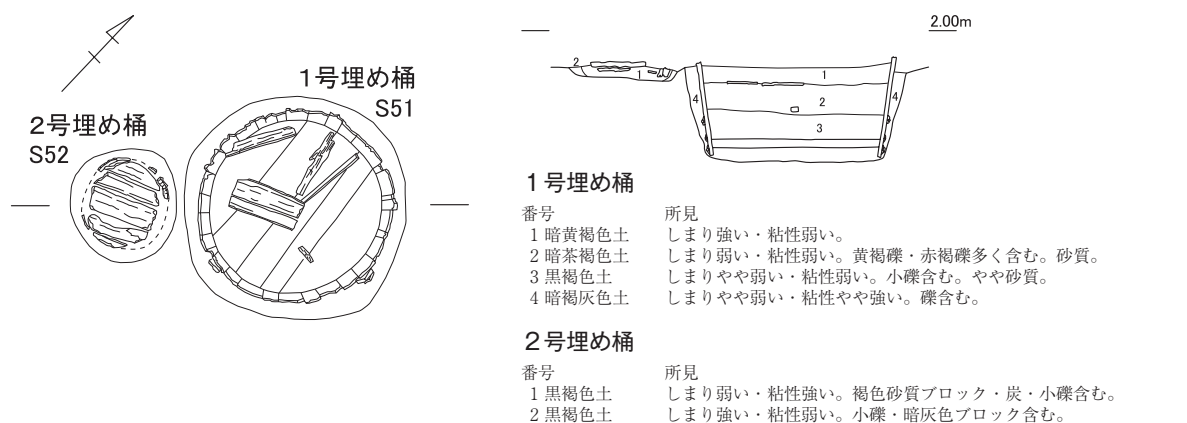
出土遺物は水鉢や播鉢、花瓶など、比較的大型の機種も多く含まれる。82・83・85はいわゆるくらわんか碗である。85は外面に青磁釉、内面に透明釉を掛けわけ、見込みを釉剥ぎする。87は白磁皿の底部である。内面に菊を線刻し、底部は碁笥底となる。92の花瓶は接合して1個体となるが、接合点が小さい上に歪んだ器

形となるため別個に図化した。93・94は土師質土器の蓋と容器である。肩部に2または3個の孔をあけ、高台部は3箇所をアーチ状に削り込む。概して19世紀前半頃の廃棄土坑と考えられる。

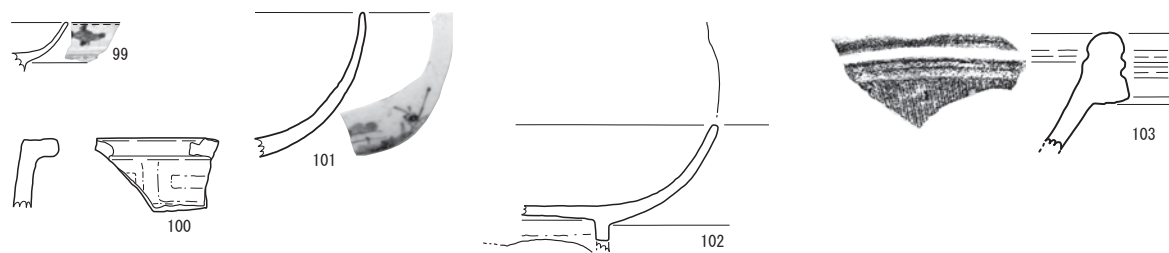
#### 3号側溝 (第20図・第21図)

近代の遺構として検出した2号側溝の礫を除去すると、その下位に軸を異にする別の石組側溝があることを確認したため、これを3号側溝とした。石組は最下部の礫のみが残っており、地下水位とほぼ同レベルとなる。後世の遺構によって破壊されている部分が多く、断続的な残存状態である。2号側溝とは異なり、一直線に造られていると考えられる。





第22図 1号埋め桶・2号埋め桶平面図・断面図 (S=1/80)



第23図 1号埋め桶・2号埋め桶出土遺物 (S=1/3)

後世の影響が大きく、明確に3号側溝出土といえる出土遺物は多くないが、近代以降のものは含まれない。96は18世紀後半から19世紀初頭頃の丸碗。97は鉢または筆筒であろう。

### 1号埋め桶・2号埋め桶 (第22図・第23図)

近代の整地層及び2号側溝を除去する際に木片が円形に検出されたため、周辺を精査したところ、埋め桶の側板を検出した。さらに南西に桶の底板を確認し、それぞれ1号埋め桶、2号埋め桶とした。いずれも桶の上部を後世の削平によって失っている。

1号埋め桶は検出面での直径は1mを測る。桶の下半は地下水に漬かっていたためによく残されていた。またタガも中輪の1本と後輪の2本が残っていたが、これらは劣化が激しかった。底板は5枚の板材からなる。

2号埋め桶は底板のみの検出である。底板の直径約30cmと小型で、1号埋め桶よりも浅く設置されたために大半を後世の削平で失っている。底板の周囲に、わずかに側板の残存らしき木片が確認された。

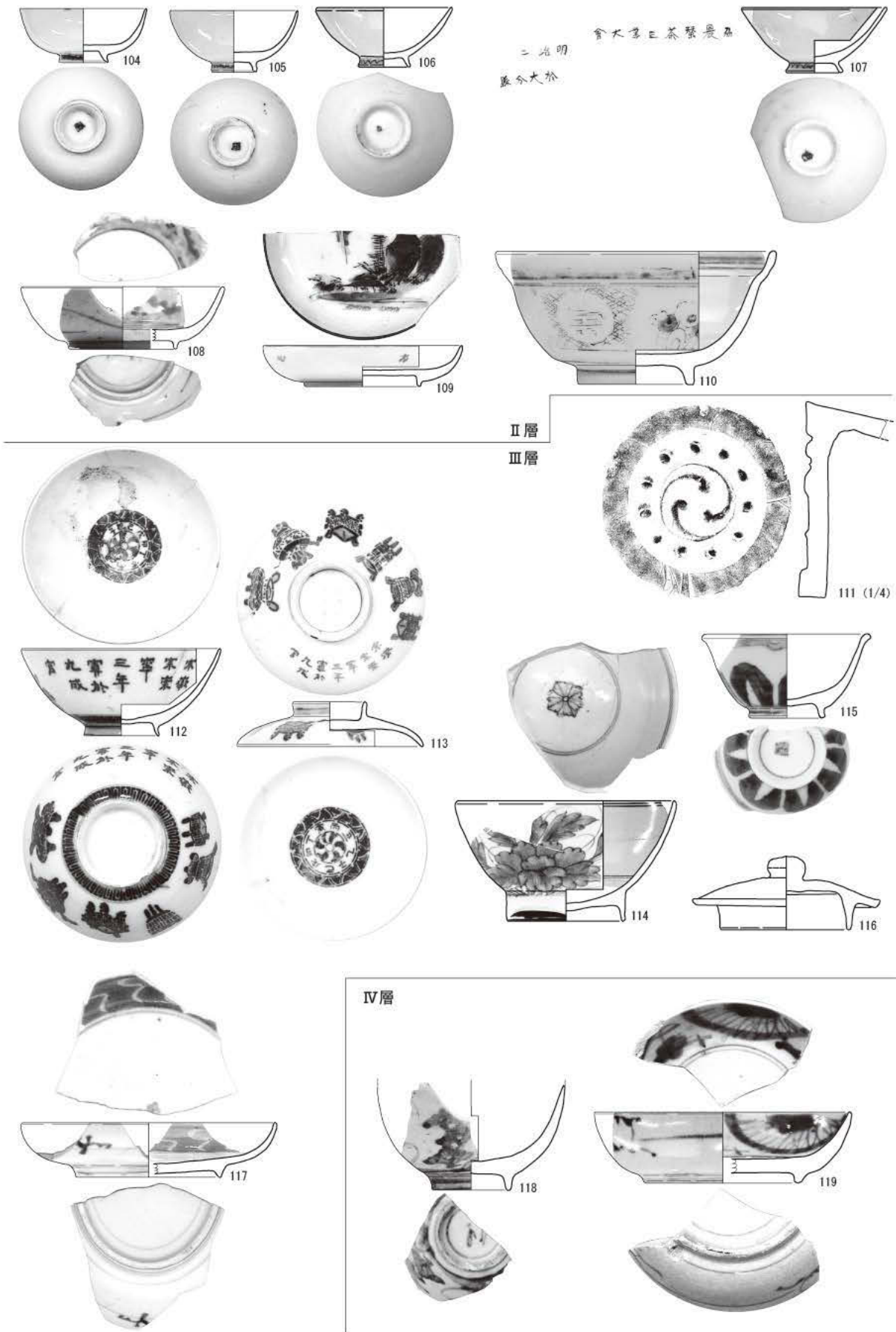
1号埋め桶と2号埋め桶は1対のものであろう。大小の便所桶の可能性はあるが、発掘調査時には明らかにできなかった。

いずれの遺構も出土遺物は小片ばかりで数も少ない。99は手塩皿、101は丸碗、100は鉢であろう。102は皿または鉢と考えられ、高台を削り込む。口縁は輪花となる可能性がある。

### 整地層出土遺物 (第12図・第24図)

A区では、44や47などⅡ層及びⅢ層には明治以降の遺物が少ないながら含まれる。しかしⅣ層は幕末から明治初期頃の56・57を上限とし、ほとんどが18世紀から19世紀代の近世遺物である。図化していない資料のなかにも型紙刷りや銅板転写は見られない。攪乱から出土した62は、八幡浜市の市制施行が昭和10年であることから、これ以降のものである。

B区ではⅡ層中に104～107をはじめ幕末・明治期の資料が比較的多く、Ⅲ層中にも112・113などの明治初期頃の遺物が含まれる。Ⅳ層の出土遺物は少ないが、18世紀後半から19世紀初頭のものである。



第24圖 B区整地層出土遺物 (S=1/3)

掲載番号	種類	器種	法量 (cm)			文様					年代	産地	備考	
			口径	器高	底径	絵付・釉	外面	内面	見込み	高台内				
1	磁器	小坏	4.0	5.8	2.9	色絵・透明釉	花?・圏線				[九谷]	明治～昭和前期		
2	磁器	小坏	4.4	5.3	3.0	色絵・染付・透明釉	梅花?・圏線・二重圏線					明治～昭和前期		
3	磁器	小坏	(4.5)	5.3	(3.0)	色絵・染付・透明釉	梅花?・圏線・二重圏線					明治～昭和前期		
4	陶器	小碗	(7.1)	4.2	3.2	色絵・透明釉	菖蒲?・「真為徳」か					18C	肥前系	釉下彩・京風陶器か
5	磁器	小坏	5.7	3.0	2.2	染付・透明釉	「通水記念」か			記号		昭和8年		高台砂付着
6	磁器	小碗	(7.7)	4.1	3.0	二重圏線・鳳凰・麒麟						幕末～明治	肥前系	(堀方)・高台内に刻印
7	磁器	小坏	6.2	4.6	2.9	色絵・クロム青磁・白土・透明釉	草花					明治～大正	瀬戸美濃	(堀方)
8	磁器	碗	(100)	(4.5)	(3.4)	色絵・クロム青磁・透明釉	草					明治～大正	瀬戸美濃	(堀方)
9	磁器	小皿	(14.4)	3.0	(6.0)	染付・透明釉	圏線	草花			圏線	近代	肥前系	(堀方)・口箱・釉下彩
10	磁器	小皿	(14.6)	2.8	(7.7)	色絵金彩・透明釉		風景?				近代	肥前系	(堀方)
11	磁器	小皿	12.5	2.4	6.6	透明釉		区画・桐・菊?・菱・網目・七宝	花・二重圏線			明治20～	肥前系	(堀方)・口箱・銅板転写
12	土師質土器	焙烙												(堀方)
13	陶器	搦鉢	(136)	5.5	(7.5)	鉄釉						近代?		
14	瓦	軒丸瓦	瓦当径(8.5)	周縁幅0.9	瓦当厚1.6									菊花・花卉8枚
15	陶器	酒瓶	3.1	25.7	9.6	染付・白釉・褐釉	「月形 高野酒場」 「〇正」					明治～昭和前期		底面白釉掻き取り・砂付着
16	磁器	合子蓋?	(4.7)	(1.9)	(2.5)	透明釉	雷文・蓮弁						肥前系	(S43/S44)・瀬刺
17	磁器	小碗			(2.4)	染付・透明釉	蓮弁・梅菌					幕末～明治		(S10)
18	磁器	小碗	(7.7)	3.2	(2.8)	染付・透明釉						幕末～明治		(S13)
19	磁器	小碗	(8.0)	5.0	(3.0)	染付・透明釉	丸					1780～1810	肥前系	(S43/S44)・小丸碗
20	磁器	小碗	(8.6)	4.5	(3.2)	染付・透明釉	笹・圏線	圏線				18C後	肥前系	(S49)・丸碗
21	磁器	小碗	(7.8)			色絵・透明釉	毘沙門亀甲・草花					18C後～19C初	肥前系	(S49)・丸碗
22	磁器	小碗	(7.5)			染付・透明釉	鶴					1780～1820		(S6)・丸碗
23	磁器	小碗			(2.9)	色絵・透明釉	松?・圏線	圏線				1810～1860		(S11)・丸碗
24	磁器	蓋付き鉢	(8.0)	4.1	(4.8)	色絵・透明釉	松?・圏線					18C末～19C初		(S11)
25	磁器	小皿	(13.3)	2.3	(7.3)	染付・透明釉		草花	二重圏線・五弁花?					(S7)・見込み蛇の目軸剥ぎ
26	陶器	火入	(9.2)			透明釉								(S7)・白化粧土
27	陶器	蓋	(14.5)			鉄泥	飛びカンナ							(S8)
28	土師質土器	坏	(11.5)	3.0	(7.4)							15C		(S48)・底部糸切り
29	陶器	甕												(S43/S44)・当て具痕
30	陶器	植木鉢	(15.5)		(9.0)	鉄釉							福岡?	(S12)
31	土師質土器	火鉢	(20.2)											
32	磁器	小坏	(6.7)			色絵・透明釉		草花				幕末～明治		(S34)・内面上絵付
33	磁器	小碗	(8.3)			染付・透明釉	市松網目					1780～1810	肥前系	(S55)・丸碗
34	陶器	小碗				灰釉								萩 (S55)・底面へら削り
35	磁器	蓋	5.7	1.9	4.3	透明釉								(S55)・端反碗蓋か
36	磁器	碗蓋	(9.2)	(2.8)	(3.6)	染付・白釉?	草花・圏線	雷文・二重圏線	圏線	福字		1810～1860	肥前系	(S55)・端反碗蓋か
37	陶器	蓋	(13.1)			鉄泥・白土	飛びカンナ							(S55)
38	陶器	水鉢			(13.0)	緑釉							瀬戸美濃	(S41)
39	陶器	搦鉢										18C後	堺	(S59)
40	土師質土器	焙烙												(S35)
41	瓦	軒丸瓦	瓦当径(14.6)	周縁幅2.1	瓦当厚2.0									(S34)・右三つ巴
42	磁器	紅猪口	(5.3)			色絵・透明釉	紅葉							肥前系
43	磁器	小碗	(7.0)	5.3	3.4	染付・透明釉	草					1810～1860	肥前系	小丸碗
44	磁器	碗	(10.1)	6.1	3.8	染付・透明釉	草花・雲	六重圏線	?			明治	肥前系	端反碗
45	陶器	搦鉢			11.9	鉄釉								福岡か
46	土師質土器	焙烙?												下半部スス付着
47	磁器	小坏	6.0	5.7	3.4	染付・透明釉	市松					明治初期	肥前系	型紙刷り
48	磁器	碗	(8.0)	5.6	(2.6)	染付・透明釉	扇子					1780～1810	肥前系	小丸碗
49	磁器	碗	(8.0)	5.4	(1.8)	染付・透明釉	草		?			1780～1810	肥前系	小丸碗
50	磁器	碗	(10.4)	5.8	4.0	染付・透明釉	草・宝珠	雷文	「千翠満千年」			1810～1860	肥前系	端反碗
51	磁器	小皿	13.8	3.0	7.2	染付・透明釉		草	五弁花			18C後～1810	肥前系	見込み蛇の目軸剥ぎ
52	磁器	小皿	13.2	4.4	6.4	染付・透明釉		草花	山水?			18C後半	肥前系	蛇の目型高台
53	陶器	碗	(12.8)			薬灰釉								萩
54	陶器	土瓶蓋	9.4	2.7	3.8	鉄釉								底部糸切り
55	陶器	搦鉢				鉄釉						18C後	堺	
56	磁器	小坏	(5.7)	3.1	2.2	染付・透明釉	梅菌	山水				幕末～明治		内面上絵付
57	磁器	碗	(11.7)	4.8	(4.3)	染付・透明釉	草花・圏線・蓮弁・梅菌	宝珠つなぎ				1820～1860	肥前系	
58	磁器	小碗	(8.2)	5.4	(3.4)	染付・透明釉	宝						肥前系	
59	土師質土器	焙烙												
60	磁器	火入	(8.8)		(8.2)	透明釉								
61	瓦質土器	火鉢?	(16.3)											
62	陶器	醤油瓶	3.5	34.5	16.4	色絵・染付・白釉・褐釉	「商標マルイ醤油」 「八幡浜市今井商店」					昭和10年～		底面砂付着

第1表 遺物観察表(1)

掲載番号	種類	器種	法量 (cm)			文様					年代	産地	備考	
			口径	器高	底径	絵付・釉	外面	内面	見込み	高台内				
63	磁器	碗蓋	(3.7)	2.4	3.4	染付・透明釉	草花・桜?				福字	幕末～明治	肥前系	
64	磁器	碗	(10.3)	4.2	(3.5)	染付・透明釉	草花・桜?・雀				福字	幕末～明治	肥前系	
65	磁器	碗	(8.8)	4.0	(3.3)	染付・透明釉	草花					18C前	肥前系	丸碗
66	陶器	碗			3.7	灰釉								
67	磁器	碗	11.2	5.3	3.4	染付・透明釉	格子・圏線	二重圏線・圏線	草?			1820～1860	肥前系	高台砂付着・蛇の目釉剥ぎ・見込み砂付着
68	陶器	碗	(11.0)	5.6	4.6	透明釉						17C末～18C前	肥前系	呉器手碗
69	磁器	小皿			7.7	染付・透明釉		草花	波頭・二重圏線	?		18C後	肥前系	蛇の目凹型高台
70	陶器	挿鉢										16C	備前	
71	瓦	軒丸瓦	瓦当径(14.3)	周縁幅1.8										右三つ巴・胎土粗い
72	瓦	軒平瓦	瓦当幅4.8	文様帯幅2.7	頸部幅1.9									葛文
73	磁器	碗×鉢	(17.5)			染付・透明釉	丸・青海波・格子・圏線	二重圏線				18C末～19C初	肥前系	
74	磁器	仏飯器		(6.7)	4.0	色絵・透明釉	圏線・草花・菱					18C末～19C初	肥前系	
75	土師質土器	焙烙										18C前～中		孔あり
76	陶器	挿鉢	(31.1)	12.1	(15.5)							18C後	堺	
77	磁器	合子	(5.2)	2.6	3.8	透明釉								目跡3箇所
78	磁器	蓋	5.8	1.7	3.9	透明釉						18C後半～		
79	陶器	小皿	(12.5)	3.6	4.3	銅緑釉						17C後	肥前系	化粧土・蛇の目釉剥ぎ・高台削り出し
80	磁器	紅皿	4.2	1.3	1.1							19C前	肥前系	型押成形
81	磁器	紅皿	4.7	1.8	1.1							19C中	肥前系	型押成形
82	磁器	碗	(10.8)	4.6	(3.9)	染付・透明釉	草花・圏線・二重圏線					18C後	肥前系	くらわんか碗・高台砂付着
83	陶器	碗	(10.0)				草花					18C後	肥前系	陶胎染付・くらわんか碗・白化粧土・貫入
84	磁器	碗	(9.5)	5.5	3.2	染付・透明釉	草花・圏線	二重圏線	五弁花			1780～1810	肥前系	高台砂付着
85	磁器	碗	10.8	5.1	3.9	染付・青磁・透明釉			二重圏線・五弁花			18C後～中	肥前系	くらわんか碗・蛇の目釉剥ぎ・高台砂付着
86	磁器	猪口	(8.9)	6.6	(6.5)	染付・透明釉	若松・二重圏線					18C後	肥前系	蛇の目凹型高台
87	磁器	皿			5.2	透明釉				菊花?			肥前系	線彫
88	磁器	皿	(13.9)	3.7	(9.0)	染付・透明釉	唐草・二重圏線	?	波頭・二重圏線			19C前?	肥前系	蛇の目凹型高台
89	陶器	土鍋	(17.0)	9.3	(7.4)	鉄釉						18C後	関西系	3足・底部スス付着
92	磁器	花瓶	3.4		(8.7)	染付・透明釉	圏線・二重圏線・笹・山水					19C	肥前系	頭部傾く
90	陶器	蓋	5.1	2.3	4.5	鉄釉								
91	陶器	蓋		(4.8)	4.5	緑釉								下面にスス付着
93	土師質土器	蓋	1.8	2.6	8.0									中央に孔
94	土師質土器		(8.0)	17.2	14.8									肩部に孔2×2箇所・高台加工
95	陶器	挿鉢	35.2	12.9	17.1							18C後	堺	
96	磁器	小碗			(3.3)	染付・透明釉	?			?		18C後～19C初	肥前系	体部下半に白化粧か
97	磁器	蓋付鉢×筆筒	(11.2)	8.1	(7.4)	染付・透明釉	圏線・草花・二重圏線							
98	陶器	甕				灰釉・鉄釉								
99	磁器	手塩皿?				染付・透明釉	菱・圏線・二重圏線						肥前系	
100	磁器	鉢?				青磁	四角							陽刻
101	磁器	碗				染付・透明釉	草花					18C～19C	肥前系	
102	磁器	皿×鉢				褐釉								輪花皿・高台加工
103	陶器	挿鉢										18C後	堺	
104	磁器	小坏	6.9	2.9	2.5	染付・透明釉	櫛歯			記号	幕末～明治			
105	磁器	小坏	6.9	3.3	2.4	染付・透明釉	櫛歯			記号	幕末～明治			
106	磁器	小坏	7.3	2.7	3.2	色絵金彩・透明釉	櫛歯	「清酒〇〇商」				幕末～明治		
107	磁器	小坏	7.8	3.0	3.5	染付・透明釉	「協農蚕茶三業大会 明治二 於大分県」・櫛歯					明治2?		
108	磁器	皿	(13.4)	4.2	(7.0)	染付・透明釉	唐草・圏線	秋草・二重圏線	五弁花	圏線		18C後～19C	肥前系	コンニャク印判
109	磁器	小皿	(10.6)	2.2	(6.0)	染付・透明釉	「〇〇」		山水			明治	肥前系	
110	磁器	鉢	(15.0)	8.1	6.2	色絵・透明釉	寿字・花	二重圏線				18C前		
111	瓦	軒丸瓦	瓦当径13.8	周縁幅1.8	瓦当厚1.9									右三つ巴・珠文11個
112	磁器	碗	10.5	4.7	3.9	染付・透明釉	故事・鼎・蓮弁		古方位			明治初期	肥前系	型紙刷り
113	磁器	碗蓋	9.9	2.4	3.8	染付・透明釉	故事・鼎		古方位	「大明成化年製」		明治初期	肥前系	型紙刷り
114	磁器	碗	(11.6)	6.2	6.5	染付・透明釉	草	二重圏線	花			1780～1820	肥前系	広東碗
115	磁器	小碗	(9.0)	4.5	(4.0)	染付・透明釉	蓮弁?			圏線・記号		19C	肥前系	口錆・端反碗
116	陶器	土瓶蓋	10.0	3.9	6.8	鉄釉						18C	関西系	
117	磁器	小皿	(13.5)	2.9	(7.6)	染付・透明釉	唐草・圏線	波?・二重圏線	五弁花			1780～1810	肥前系	
118	磁器	碗			(4.0)	染付・透明釉	松?・二重圏線			銘・圏線		18C中～後半	肥前系	くらわんか碗
119	磁器	小皿	(13.5)	3.8	(8.1)	染付・透明釉	唐草・圏線・二重圏線	菊花・二重圏線		圏線		18C後～19C	肥前系	

第1表 遺物観察表(2)

## 第3章 まとめ

### 第1節 調査地の変遷

調査地は、近世城下町の中でも藩政の中心となる三の丸や城内への入口となる大手門に近く、藩にとっての重要施設が設けられていた。現存する城下絵図として最も古い元文3年(1738)の絵図では、家老職も務めた西名家の屋敷地として描かれている。隣接する現・三余館の位置は六代藩主毛利高慶の孫で七代藩主毛利高丘となる寅太郎の居宅である。その後、文化2年(1805)には三府役所(糾府・米金府・勘定府)と呼ばれる役所となり、文政9年(1826)の絵図では数棟の建物が描かれている。この三府役所は明治維新直後まで残っていたらしく、明治4年(1871)頃の絵図に建物が描かれている。

明治7年(1874)頃にはこれらの施設は解体され、毛利家の邸宅になったとされる(文献1)。邸宅の詳細は明らかではないが、明治5年(1872)に解体されたという天祐館の表部分を移築したと伝わっている(文献5)。天祐館は文久2年(1862)に三府役所の北西に建てられた、十二代藩主毛利高泰の隠居所を明治3年に増築した御殿である。

また、明治23年(1890)には建替えが行われている。東京の宮内省に出仕していた十三代目当主毛利高範が職を辞して佐伯で生活するための改築といわれ、御居間で発見された明治23年の棟札は、この時期の建替えを示していると考えられる。毛利家の邸宅は警露館と呼ばれ、当時の上流階級の人々を集めて饗応することもあった。明治26年(1893)には佐伯で教師をしていた国木田独歩も招かれている。明治40年(1907)には毛利家が東京へと移り住んだため、警露館は一般に開放さ

れ、市民の社交場となった。

その後、大正末期から昭和初期頃に料亭池彦へと払い下げているが、この時に改築や改装されたものかどうか、払い下げの経緯も含めて資料はない。昭和に入ると、佐伯は軍都として発展することとなる。昭和6年(1931)に海軍航空隊の基地として選定されると、昭和9年(1934)、水交社が置かれた。水交社は海軍将校らを対象に懇親会・講演や被服物品の販売を行う団体で、池彦の一部を借り上げて活動したのであろうか。戦時中には、庭にコンクリート造の防空壕が設けられた。終戦を迎えると水交社は解体され、再び料亭池彦として営業を続けている。

昭和50年(1975)頃には建物が老朽化したためか、大規模な建て替えがなされた。御居間を除いて改築され、特に主屋は鉄骨造となり地下1m以上に達するコンクリート基礎と地下駐車場を造っている。また土蔵も傷みが激しく、基礎から建替えて一部コンクリート造となった。閉店したのち、平成21年に佐伯市が歴史資料館用地として購入した。

ところで、発掘調査前には駐車場となっていた池彦と三余館の間の土地は、近代初頭までは三府役所の近くにあった御代官所・御郡代所に相当する。これらの施設は三府役所と同時に解体されたと考えるのが妥当であろう。

大正5年(1916)には佐伯町役場が新築されている。昭和16年(1941)には市制施行により佐伯市役所となり、翌17年には庁舎の建替えを行っている(文献3)。市庁舎は昭和39年には中村南町の現位置に移転し、以降は駐車場となって現在に至っていた。こちらも平成21年に歴史資料館用地として佐伯市が購入した。

## 第2節 写真資料の検討

ここで、近代から現代に至るまでの写真資料から、建物の変遷を検討してみる。模式図に記号を振って検討を試みた。模式図では棟ごとにアルファベットを付し、建替えごとに「'」を追加した。なお、各棟の名称は正式なものではなく、報告のための便宜的なものである。

### 明治44年（1911）頃古写真（資料1）

### 大正5年（1916）頃古写真（資料2）

調査地西方の佐伯城から、ほぼ同じアングルで撮影された写真である。A区には警露館が写り、土塀で囲まれていたことがわかる。B区には大正5年に完成する佐伯町役場が建設中である。

### 大正8年（1919）頃空中写真（資料3）

警露館の北西（写真左手前）で大正8年に完成する南海部郡役所が建設中である。

A区の警露館とB区の佐伯町役場は前掲の写真から時間差も少なく、変化していないものと考えた。

警露館はa～fの建物で構成される。aを主屋、bを離れと仮称する。明治23年の棟札が発見された御居間はcである。aとbをd・eでつなぐ。fは土蔵である。道路側には付属屋g・hのほか、三府御門と呼ばれる旧三府役所の門iがある。B区には完成した佐伯町役場jがある。kは町役場の門であろうか。

### 昭和23年（1948）空中写真（資料4）

戦後に米軍が撮影した空中写真である。この時点では警露館は料亭池彦に払い下げられている。主屋周辺ではdとeの形状が変わっている。また付属屋に変化が見られるほか、模式図では省略したが、e'とcの間に防空壕が造られる。

B区にあった佐伯町役場は昭和17年に佐伯市役所j'に更新された。



資料1 明治44年（1911）頃佐伯市街地写真



資料2 大正5年（1916）頃佐伯市街地写真

### 昭和40年（1965）空中写真（資料5）

### 昭和50年（1975）空中写真（資料6）

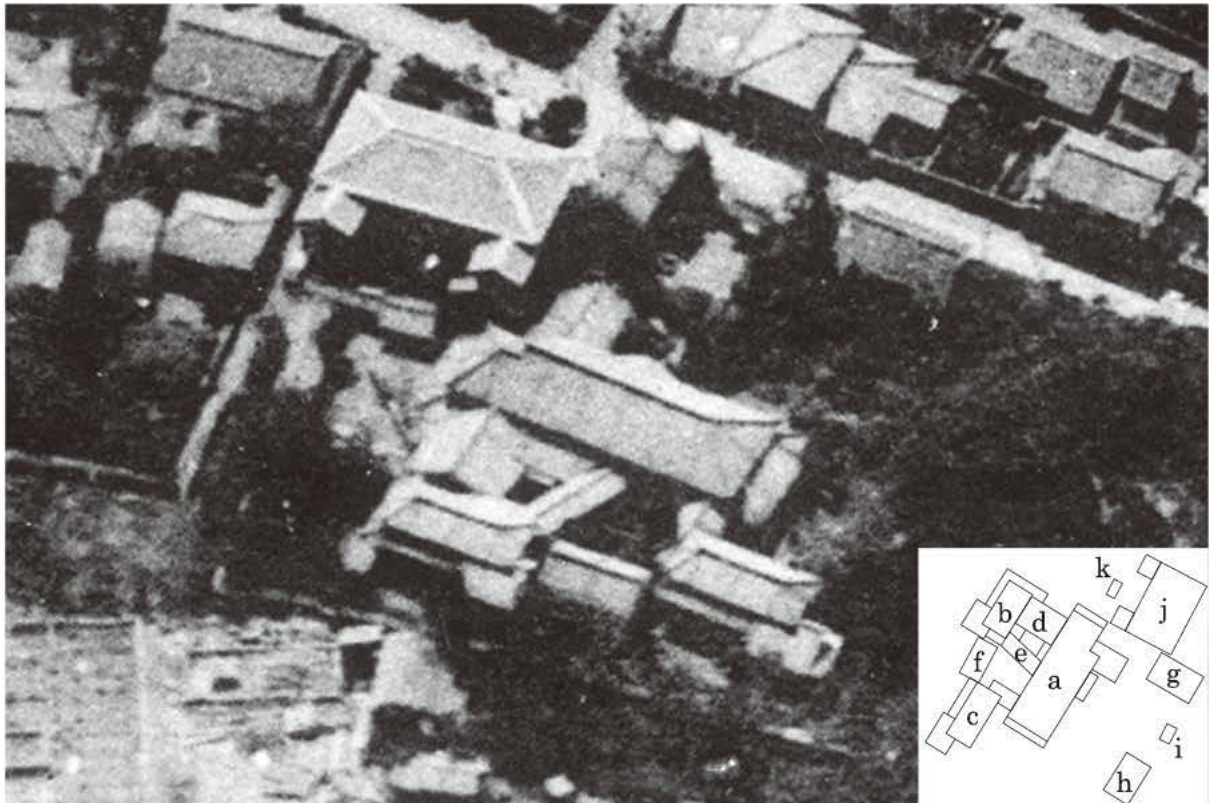
A区池彦ではd'とe'が以前のように別棟に戻っている。また御居間の南に大広間n、さらに西に客室が増築されていく。

B区では昭和39年の佐伯市庁舎移転によって旧庁舎となったj'が一部を残して解体されている。

### 平成20年（2008）空中写真（資料7）

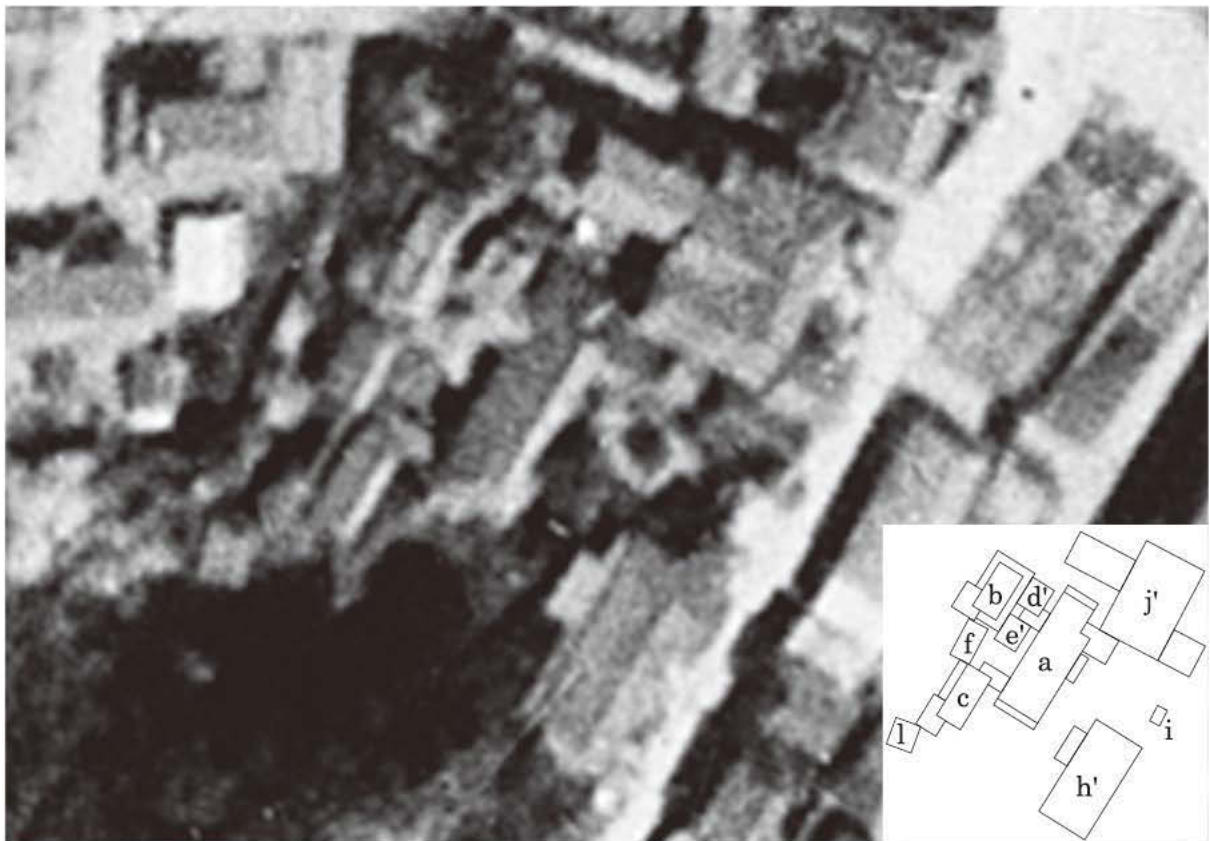
昭和50年の大規模改築後の状況である。模式図は平成21年度の解体工事時の間取り図から作成した。主屋は屋根こそ瓦屋根だが鉄骨造の現代建築a'に建て変わり、間取りも現代的なものになっている。bも小規模な式場b'となり、これに伴いd''・e''も改築されていると考えられる。またh''は店舗h'''となる。さらに、写真では判断つかないが、この頃に土蔵fを立て替えたことが判明している。当初から位置が変わっていなかった三府御門iも、南東に面している国道の拡幅によって少し敷地の内側に移築された。

残っていた旧佐伯市庁舎j''も完全に撤去され、B区は全体が駐車場となっている。

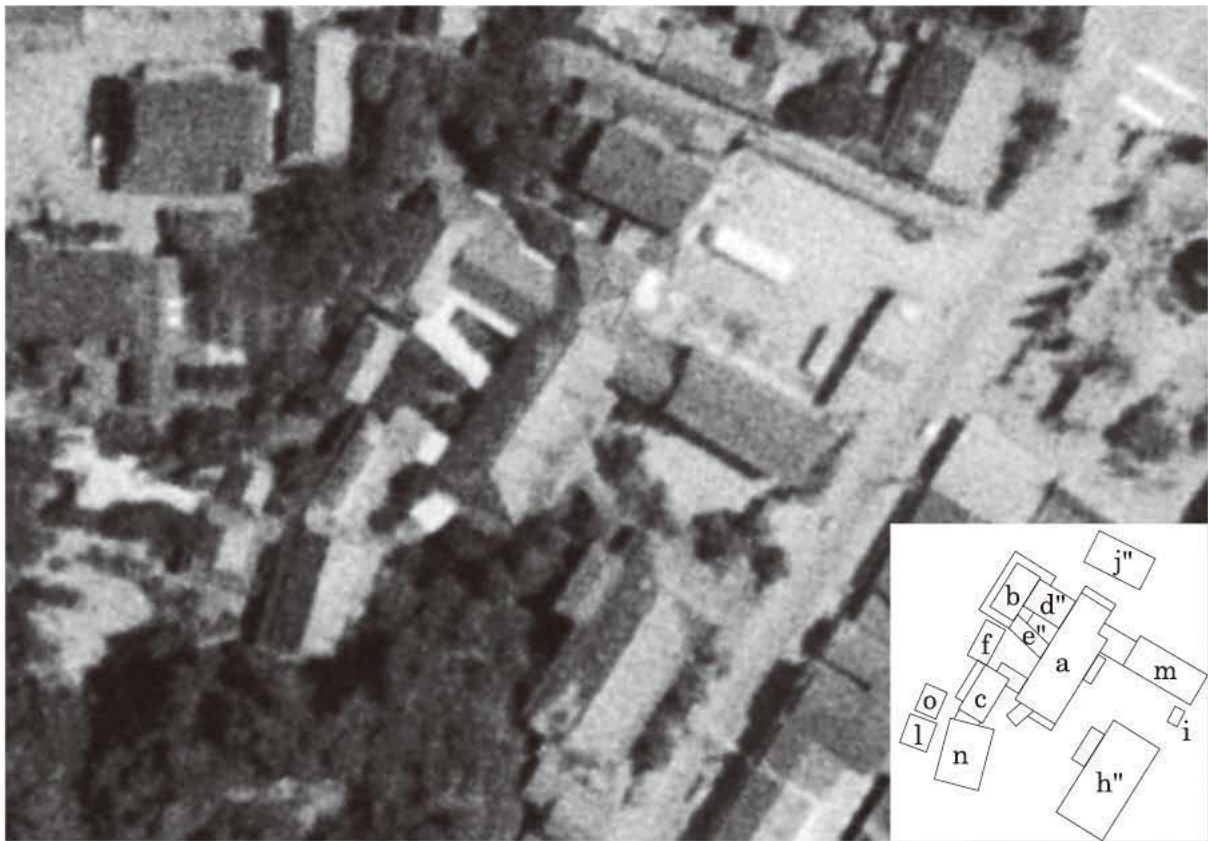


写真は西から撮影 模式図は上が北

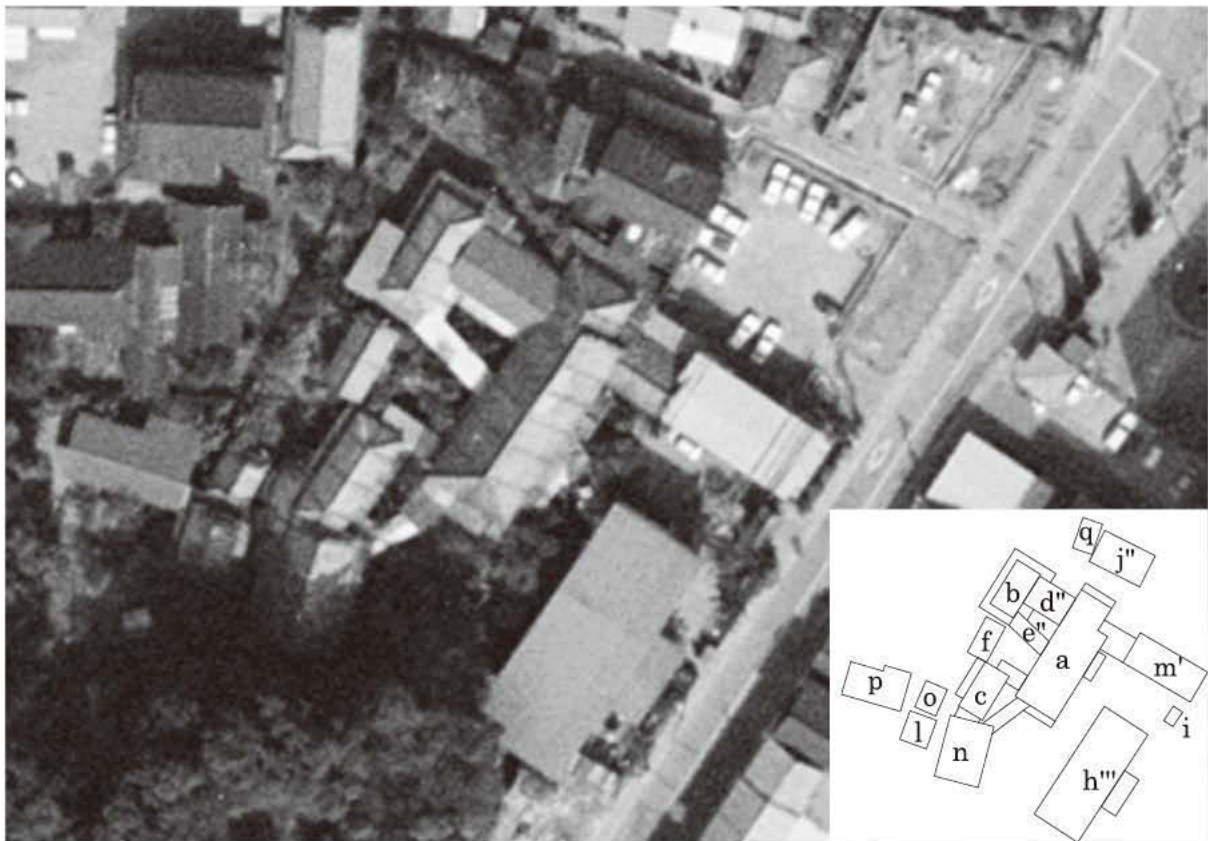
資料3 大正8年（1919）頃空中写真及び警露館模式図



資料4 昭和23年（1948）空中写真及び警露館跡模式図



資料5 昭和40年（1965）空中写真及び警露館跡模式図



資料6 昭和50年（1975）空中写真及び警露館跡模式図





資料7 平成20年（2008）空中写真及び警露館跡模式図

### 3節 まとめ

#### 《近世の遺構について》

今回の発掘調査によって検出した近世遺構は、B区の近代整地層Ⅱ層の下位に残されていた2～4号土坑・3号側溝・1～2号埋め桶である。いずれも近代の整地に伴って遺構の上部を破壊されていると見られ、遺構の下半から最下部のみを検出した。出土遺物が少ない遺構もあるが、概ね19世紀前半頃の遺構であろう。

19世紀前半頃のB区は三府役所に付随する御代官所と御郡代所にあたり、検出した遺構はこれらの施設に関連したものと考えられる。具体的な上屋の推定は難しいが、文政9年の絵図には一直線の側溝と思われるものが描かれ、井戸と一体となっている(資料8)。この側溝が検出した3号側溝と同一のものであることも考えられる。

#### 《近代の遺構について》

前節では調査地の変遷を古写真から確認したが、ここで今回の調査で検出した近代遺構と比較して検討してみる。

A区の検出遺構は、大きく2時期に分けて考えることとする。すなわち、Ⅱ層上面で検出した1号井戸・1号側溝・1号建物と、その下位で検出した2号建物である。

まず、1号建物の基礎からは近世末頃から幕末・明治頃の遺物が出土している。このことから、建築時期は明治前半頃と判断した。そこで、前節で検討したなかで最も近い時期の大正期の警露館模式図を重ねてみると、離れbが位置・規模ともに一致することが判明した。(第25図) 嚴重な地業が施されていた建物の南側は下屋庇が一回り大きく伸びており、こうした上屋構造の違いを反映させたものであろうか。



資料8 文政9年(1826)御城下分見明細図絵

また、1号建物と検出面を同じくする1号井戸・1号側溝について、同様に大正期の建物配置図と重ねると、警露館の主屋aと離れbをつなぐ建物dの位置にあたる。1号側溝の出土遺物からは明治から近代末頃までは機能していた事が窺えるため、建物dは1号井戸の上屋と考えてよいだろう。1号井戸は使用した水をそのまま1号側溝に排水していたと考えられる。通気性や衛生面を考えると、その上屋であるdは壁をもたない構造だったのではないかと。おそらく建物eが主屋aと離れbをつなぐ渡り廊下であり、建物dは主屋と離れ両方から利用できる屋外井戸の井戸屋形であったと思われる。

以上により、A区で検出した1号建物・1号井戸・1号側溝は明治23年に改築された毛利家邸宅、警露館の一部であることがわかる。そして、1号建物は前節で見たように昭和50年まで位置や外観に大きな変化はなく、発掘調査においても建て替えられた痕跡はない。主屋a・御居間cと同様に、料亭池彦となった後も警露館の一部として保存されていたと考えられる。

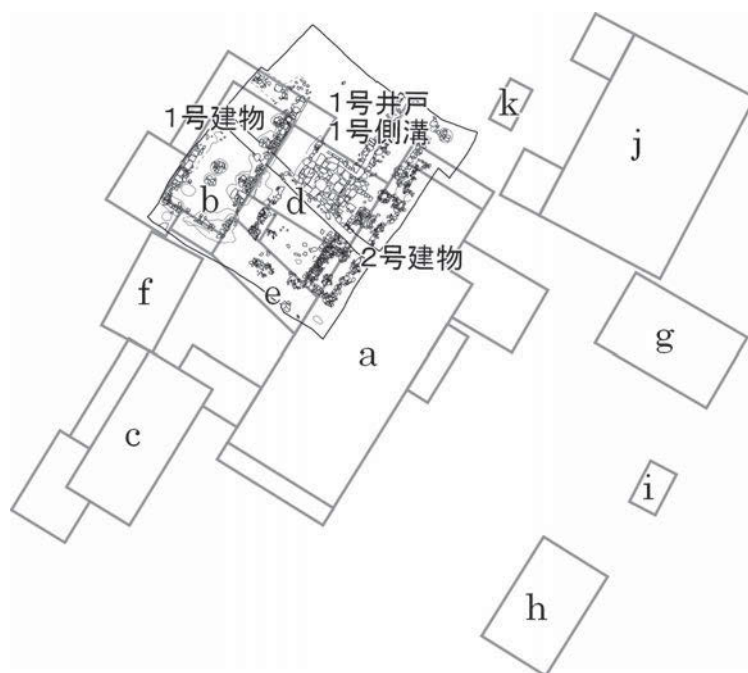
一方で、井戸屋形dは渡り廊下eとともに戦後の時点で形状が大きく変わっている。第2章で若干触れたが、佐伯市街地では昭和8年に上水道が整備されている。それ以前は飲料水に乏しく、私設水道はあったものの水量

不足は著しかったといい、井戸水によるところも大きかった（文献2）。上水道の敷設によって佐伯市民は飲料水不足から解放されることとなるのだが、それに伴って井戸の必要性も薄れていき、1号井戸と1号側溝も戦前頃には不要のものとなったのであろう。なお、建て替え後のdの用途については手がかりがなく、不明である。dの平面形は遺構の位置とは無関係に見え、この時点で1号井戸・1号側溝は廃絶していると考えられる。

さて、次に2号建物についてであるが、検出状況から1号建物な

どよりも古期の遺構である。しかし、出土遺物は1号建物と大差はなく、近世末頃から幕末・明治期のものである。検出面となったIV層もほぼ同様に、幕末から明治期の遺物を上限としている。前述のように1号建物などの建築年代は明治23年と判断できるので、2号建物は明治初期頃から明治23年までの建築物と考えられる。明治初期といえば、第1節で述べたとおり、明治4年頃まで残っていた三府役所を解体し、北西にあった天祐館の表部分を毛利家の邸宅として三府役所跡に移築したといわれる時期である。つまり、2号建物は明治初期に天祐館の一部を移築された初期の毛利家邸宅であると考えられる。この初期の毛利家邸宅については指図や写真は残されていないが、天祐館の一部を移築したという前提で、わずかながら考察を加えてみる。

天祐館については、既に発掘調査報告書が刊行されており、詳細はそちらに掲載されている。概略としては、文久3年に藩主の居宅である南御殿として城内に建築され、維新後の明治3年に一部増築して天祐館と改称した

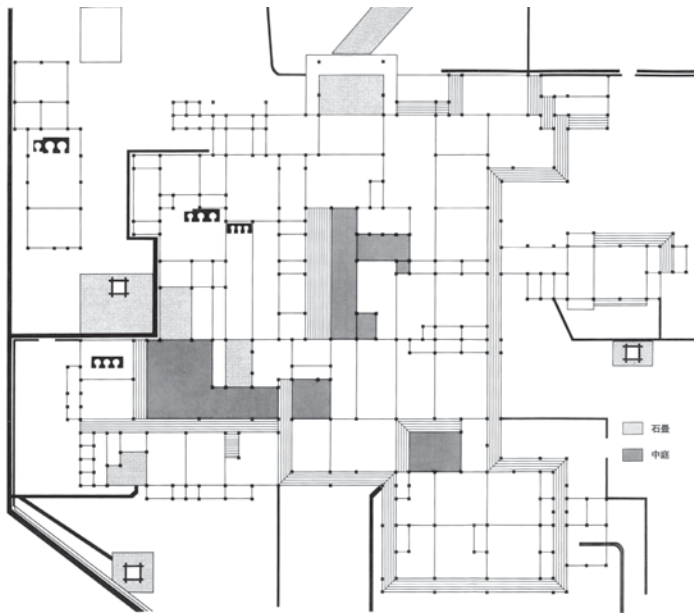


第25図 A区検出遺構と大正8年頃警露館模式図(S=1/500)

が、明治5年頃には解体された建築物である（文献1）。指図は現存していないが、佐伯史談会会員佐藤巧氏によって写真を元に作成された図面がある（資料9）（文献1）。この指図に見る天祐館のうち、玄関付近からかまどのある台所付近までを移築して、明治初期の邸宅としたと考えるのが妥当であろうか。2号建物は毛利家居宅の北西端にあたり、焼土や灰溜まりの存在から、かまどの存在が予想された。天祐館表部分の玄関を国道側の南東方向に向けると、建物の北西にかまどがくることも整合的である。

B区の近代遺構は、II層上面の2号側溝、3号側溝と、II層下位の1号土坑である。

II層は出土遺物から近代の整地に伴うものであり、3号建物の建築と2号側溝の設置のための大規模な整地層だと考えられる。3号建物は近代から現代にかけての建築物であり、第2節の写真資料の中では、昭和16年に建てられた佐伯市庁舎であると思われる。庁舎は昭和39年まで使用された後に解体されており、3号建物の解体に伴うと思われる廃棄



資料9 天祐館指図（文献1より転載）

土坑に現代遺物が大量に含まれることとも矛盾はない。2号側溝は3号建物の壁形状に沿うように曲がっていることから、3号建物と同時期に設けられた可能性が高い。

1号土坑は近代初頭の廃棄土坑と考えられる。時期的には三府役所もしくはその解体と関連する可能性がある。

#### 《遺物について》

ここで、いくつか特徴的な遺物について述べる。

28・70は中世に遡る資料である。中世の番匠川河口には塩屋千軒と呼ばれる製塩集落があったといわれている（文献2）が、この地で生活が営まれていたことを示す資料が出土したことは重要である。調査地北西の城山には、佐伯城築城までは11世紀創建と伝わる八幡社があったといわれることも関連するかも

#### 【参考文献】

1. 佐伯市教育委員会 1998 『天祐館遺跡』
2. 佐伯市史編さん委員会 1974 『佐伯市史』
3. 佐史談会 2008 『図説新佐伯志』
4. 佐藤巧 2007 「旧毛利高範邸の保存活用整備について」『佐伯史談』第205号
5. 緑の会 1985 『佐伯の文化財（その一）』

知れない。

5・107は年代が特定可能な資料である。5は通水式が昭和8年10月21日に佐伯小学校で挙行された（文献2）時のものである。佐伯小学校は調査地から北に150mの位置にある。107は明治2年または3年のものである。農蚕茶三業大会の大分県大会のものであるが、産業振興大会のようなものだろうか。式典や大会の記念杯であり、調査地が近世以来政治・行政的機能を担ってきたことの一端を示す資料といえる。

62は愛媛県八幡浜市で販売された醤油瓶で、昭和10年の市制施行から戦前までのものである。伊予地方とは中世以前から現在に至るまで豊後水道を往来した交流が盛んである。醤油としては、県内では近世から続く老舗も多い臼杵市が有名であるが、あえて八幡浜市の商品を購入していることも興味深い。

#### 《調査後の警露館跡など》

調査後の警露館跡及び旧佐伯市役所跡は、佐伯市歴史資料館となる。御居間と薬医門（三府御門）は復原されて、防空壕とあわせて資料館の屋外展示として公開される。また、検出した遺構のうち1号井戸の石敷きも敷地内に移設して展示されることとなった。

近世から現代に至るまで、この地は佐伯の政治・行政の中心として機能してきた。歴史資料館の開館後は、文化財の保存と活用の拠点となり、佐伯市ひいては大分県南の文化の中心として機能していくことが期待されている。



警露館跡周辺空中写真 南東から



調査区全景 手前が南東

図版2



A区近代遺構検出状況 手前が南東



B区近代遺構検出状況 手前が南東

1号井戸・1号側溝

検出状況 南西から



1号井戸・1号側溝

検出状況 北東から



1号側溝蓋石除去後 北東から



図版4



1号建物S7～S15

検出状況 北から



1号建物S7～S12

検出状況 南から



1号建物S29・S43・S44・S50

検出状況 南から





1号井戸発見状況



表土除去後の1号井戸 南から



1号側溝検出状況 北東から



1号建物S13～S15検出状況 南から



1号建物S49検出状況 南西から



1号建物S32検出状況 北東から



1号建物S29検出状況 北西から



1号建物S29半裁状況 北西から

図版6



2号建物S34～S36・S38・S41・  
S55・S56 検出状況  
西から



2号建物S55・S56検出状況  
東から



2号建物S57・S58・S59  
検出状況 南から



2号建物S33検出状況 北から



2号建物S34検出状況 西から



2号建物S35検出状況 東から



2号建物S35根石検出状況 西から



1号土坑検出状況 南から



2号土坑検出状況 北から



1号・2号埋め桶検出状況 東から



1号埋め桶完掘状況 東から

図版8



1号側溝出土遺物



1号建物出土遺物



2号建物出土遺物



1号土坑出土遺物



2号土坑出土遺物



3号側溝出土遺物

図版10



4号土坑出土遺物



1号埋め桶・2号埋め桶出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	さいきじょうかまちいせき けいろかんあと
書名	佐伯城下町遺跡 警露館跡
シリーズ名	佐伯市文化財調査報告書
シリーズ番号	第7集
編著者名	福田 聡
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号
発行年月日	2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さいきじょうかまち 佐伯城下町	おおいたけん さいきし 大分県佐伯市 大手町一丁目 51番3・4	44205	205012	32° 57' 25"	131° 53' 33"	20100507～ 20100914	970	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯城下町	城下町	近代・近世	建物礎石・井戸 側溝・土坑・埋め桶	陶磁器・土師質土器	明治23年建築の 旧藩主邸宅の一部

佐伯市文化財調査報告書第7集

### 佐伯城下町遺跡 警露館跡

平成22年度歴史資料館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査  
2015年3月

発行 佐伯市教育委員会  
〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号  
TEL 0972(22)4234 FAX 0972(22)3912

印刷 佐伯印刷株式会社 佐伯営業所  
〒876-0823 大分県佐伯市女島9032番  
TEL 0972(23)0170 FAX 0972(23)0171

